

原初の御伽噺は神話へ至る

黒樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの日を忘れない。大切なものを奪われたあの日を。全てを失つたあの日を。たつたひとつが大切で、全てで、自分であることの証明だった。

あいつを殺すこと。それが俺の全てだつたはずなのだ。

目 次

捨いもの	
テイクオーバーの使い方	
ランクS	
魔神を冠する娘	
伏兵と強敵と理解者と	
雨が降っていた	
失踪	
旅人	
停滞しない時間	
言い逃げ	
昼間の珍客	
思い出の庭	
眩むような光へ	
ストラウス	
迷い子 前編	
迷い子 後編	
	109
	105
	101
	93
	88
	82
	75
	66
	56
	49
	41
	34
	25
	16
	8
	1

拾いもの

ある日、こんな噂を耳にした。

『人の皮を被つた悪魔がいる』と。

高難度クエストを完了しギルドへ帰ろうという時だ。通りがかつた村の教会の前に大勢の人だかりができているのを見つけた。それも村総出で囮んでいるのかと思われる数、俺は何の気まぐれかその輪の中へ割つて入つた。

村長の話によると、悪魔の腕を晒した娘が中にはいるらしい。どうやら何処からか流れてきた流浪の旅の者であつたが、腕が異形に変形し人間のそれではないのだとか。早くも村から立ち去るようこうして囮むに至つてているというわけだ。

関わつた手前、一目その娘を拝んでやろうと思つた。

村長に魔導師ギルドの者だと紋章を見せると村長は快く全てを任せてくれた。

輪は散り散りになり、やがて一人になる。

俺は野次馬が去つたことを知り、教会の中へ足を踏み入れた。

「……っ」

そこにいたのは黒いボロローブを被つた人影。時折見えるローブの下から、銀髪が揺れている。隣には年端もない小さな少年少女二人。

すくりと立ち上がつたのはローブの人影だった。

まだ幼い少女の声で、威嚇するように二人の前に出る。

「……言われなくとも出ていく。だから、放つておいてくれ」

そう懇願して黒いフードが揺れた。

相変わらず顔が見えないが、少女が気に掛けているのはその幼子達らしい。

「俺は魔導師ギルドの者だ」

「……っ。ダメ、ミラ姉を連れて行かないで！」

素性を明かすと何を思ったのか、守られていた銀髪短髪少女が前に

出る。その小さな体を大きく広げて精一杯フードの少女を守ろうとしているようだつた。

「……はあ。何を勘違いしているのか知らないが俺は別に依頼を受けて此処に来たわけじゃない」

スタスターと少女達の方へ歩く。距離を詰めて、手を伸ばせば触られる位置へと。そこに着いた頃には、小さな少女の腰は引けていて、そしてまた守るように黒ローブの少女が前に出た。

ローブに隠れた右腕を掴む。――その瞬間、少年少女が腰にタックルをかましてきた。

「ミラ姉を連れて行かないで！」

「ね、姉ちゃん、逃げて！」

……人の話を聞かないお子様達だ。俺が黒ローブを連れ去るとか考えたのだろうか。子供の短絡的思考ならそれくらいだろう。思い浮かぶ最悪の選択肢は、傷つけられるか奪われるか、どちらかしかない。

必死に腰を押して倒そうとしているようだが、いかんせん子供の力では俺を倒すことは叶わない。

「やめろっ」

面倒なので黒ローブから手を離して一人の頭に手を置いてくしゃくしゃに撫でてやろうと思つたら、黒ローブから鉄拳が飛んでくる。その右拳は頬に突き刺さつた。それは幾多もの目玉が着いた、異形の腕だ。

「つたく。早とちりもいいところだ」

「――っ！」

一步も引かず、怯まず、少女の拳を受け止めた。

まさか当たるとも思つていなかつたのだろう、動けずにいた少女の腕を掴む。

俺はそのまま腕を伝い、手に手を添えて、拳を開かせた。

頬に手を添えさせる形で、彼女の手に手を重ねる。

「……それは〈接収〉と呼ばれる魔法だ。まだ魔法の使い方が未熟なんだろう。だから、このような形で発動したまま元に戻せず苦心してい

るといったところか」

「……ティク、オーバー？」

「魔法の一つだ。もつとも原初の名は……だつたが。知らずに発動したのか」

少女は反芻する。己が発動した魔法の名前を。そして名前を覚えたところで、確認するように聞いてきた。

「……じゃあ、私は悪魔に取り憑かれたわけじゃない？」

「正確には悪魔を魔法で取り込んだんだ。我が身の力とするために」

その言葉を聞いた瞬間、がくりと膝をつく。

ふわりとフードが舞い、そして――。

「……よかつた」

彼女の素顔が明らかとなつた。美しい銀髪をボニー・テールにした、自分より年下の少女の幼くも綺麗な顔が、涙で滲んでいるのを俺はただ眺めていた。

泣きじやくる少女が漸く涙を収めたところでぐうと可愛い音が鳴つた。その音が聞こえてきたのは、先程まで泣きじやくつていたローブの少女である。続けて隣の少年少女からもお腹の音が鳴る。どうやらお腹を空かせているようだ。

英國風のステッケースを開きパンを取り出すと少女達は食べ物を凝視する。右に動かせば視線も右へ、左に動かせば視線も左へ、ほらよと投げ渡すと三人はパンを分け合う前に、一番年上であろう少女がおずおずと問い合わせてくる。

「……いいのか？ 貰つても」

「ああ、その前に名前聞いてもいいか？」

「……私は、ミラジエーン・ストラウス。で、こつちの弟がエルフマン。そんで、妹がリサーナ」

それぞれ自己紹介してくれるが、話半分にミラの右手を取る。

「悪い。ミラ、先に謝つとく」

「は？ 何言つて……つて、なあつ!?」

ミラの手の甲に口付けをした。そう、キスだ。彼女は大慌てであと

ずさるとキスされた右手を左手で隠す。

「な、なな、いきなり何すんだよつ!?か、体を許した覚えはないからなつ」

「あっ、ミラ姉、手！」

「手エ?あつ……」

リサーナに言われて気づいたのだろう。ミラの右手は普通の人間の腕に戻っていた。

「応急処置だ。その腕では何かと不便だろう。本来なら自分で制御する以外に方法はないのだが……まあ、どう説明してもおまえらにはできないだろうから説明するのも手間だ、不可能とだけ覚えておけ」

釈然としない面持ちながらもパンを齧る。ミラという少女は一つ以外の残りのパンを全部妹弟に与えていた。

「つ、どこ行くんだよ」

立ち上がると不安そうにミラが見上げる。まるで捨てられた子犬のような目で俺を見上げて、涙は……まさつきので枯れていて、上目遣い涙目という心臓に悪いコンボを喰らうことはなかつたが。俺はその様子に重くため息を吐いて聞いた。

「親は?」

「……もう、とつぐの前に死んだよ」

「そうか。ついてくるか?」

「……な、何が目的だよ?」

「俺の気が変わらないうちに決めるんだな」

己が身を抱いて警戒しているのでそう伝えてやると、未だ警戒しながらも考え込んでいるようで数秒俺を睨むように見てるので、立ち去ろうとするとミラは慌てて立ち上がった。

「ついてく。ついてくから待てつて!」

リサーナとエルフマンを急かせばパンを口に詰め込む。

そんな必死な様子に俺は多少口元を緩めながら、自分の気まぐれに呆れて声も出ない。

「まつたくなんでこんな捨い物をしたんだか」と。

口に出さないでも、そう思わずにはいられないのだ。

何日かの旅を終えて、ギルド『フェアリーテイル』の門をくぐれば、騒めいでいたギルド内が一気に水を打つたように静かになつた。元々一人であるのが常日頃な俺の後ろをちょこちよことついてくる三人の子供が珍しいのだろう。遠巻きに眺めて絶句している面々を他所にバークウンターの前に座る老人の前へ俺は真っ直ぐ進んだ。

「マスター、仕事は終わつた」

「ほう、ご苦労じやつたの。毎度毎度、おまえさんは物を壊さんくて助かるわい。少しは他の面子にも見習つてほしいものじや」

子供よりも身長は低いのではないのだろうか、髭をなで付ける老人マスター・マカロフはしかしなあと俺の背後にいる三人の子供達を見る。やる。

「……しかし、そのガキどもはどうしたんじや？」

「拾つた」

「まさか一人でいるのを好むおまえさんがのお」

簡潔に述べると興味深げにマカロフは子供達と俺を見比べた。そして、すぐさま俺に視線を戻した。

「恋人も作らず先に子供たあ恐れ入つたわい」

「別に気まぐれだつての」

「おまえさんのことだから途中でほっぽり出すような心配はしてないが、これからそいつらはどうするんじや？ギルドに入れるのか？」

「それはこいつらが決めることだ。別にギルドに入ろうが入るまいが面倒は見るつもりだ。だから、まあ、体験つてことでこいつらがギルドに出入りするのを許可して欲しい」

「うむ。宿は決まつておるのか？」

「ギルドの者でない限り寮は使えない。そうでなくとも少しの間は俺の家で十分だろ。あとは勝手に決めればいい」

「自由に選ばせる、か……」

子供達に視線を戻すマカロフ。

「こやつはこう見えて案外優しいやつじや。言い方は少し誤解を招くようじやが、邪険にしとるつもりはないし多少不器用なだけの。甘えられるだけ甘えたらしい」

「……マスター、余計なことは言うな」

「ほれ、照れとるだけじやわい」

頬を搔いてそっぽを向く。ミラとリサーナ、エルフマンのいない方に視線を向けたが別の人間と視線が合つてしまつて即座にマカロフへと視線を戻した。

「今日はもう帰る」

「ま、色々あるじやろ。親の心というものを学ぶいい機会じゃ」

「……親になつた覚えはない」

「そんなつもりはなくとも、なるようになる。……まあ、親の心を知つてほしいのはあいつらになんじやがな」

マカロフの逸らした視線の先ではどんちゃん騒ぎが再開された。あいも変わらず騒がしいギルドだ。

ギルドを出てマグノリアの街並みを歩き、森の一角にある一軒家。数日帰つていない我が家へ入つて三人はキヨロキヨロと周りを見渡していた。簡素にテーブルや椅子にソファーアーが置いてあるだけの必要以上にものを置かない家だ。素つ気なく見えるのだろう。しかし、至る所に本が積まれていたり、ぎつしりと詰まつた蔵書の本棚があり、それほど殺風景ではないはずだ。

とてとてと走つて行つて、手近な本を手に取り開けるリサーナ。それに驚いたミラが声をあげた。

「おい、リサーナ！」

「別にいい。本は大切に扱え。それだけだ」

連日甘いものやらご飯やらと面倒を見て いるとリサーナだけは懐いてくれて、徐々にだが心を開いてくれている。もつともそれがミラには居心地が悪いようだが。リサーナ以外遠慮がちで馴染めていないのが現状だ。

「ついてこい」

二階に上がつて部屋を与えた。空き部屋の一つだ。それそれにひとつずつ。自由に過ごしやすいようにと計らいのつもりで与えてみたが、やはり少し遠慮の抜けない対応に困つた反応をする。

必要資金としてこの国の金銭を渡せば追い討ちになつてしまつたようだが、渋々受け取るミラもお金がないことは痛感しているのだろう。だから「悪魔退治」なんてしていただけだし。

「——つてこれ、いくらなんでも多過ぎるだろ！」

今回の仕事の報酬を全額渡したら、流石に貰えないと半分突き返してくる。

「氣にするな。あつても使わない。宝の持ち腐れだ」

地下に金庫があり、そこには山ほどの金貨や紙幣や宝石がある。仕事を適当に請け負つているうちに溜まつたものだ。もつともそれは見せてはいないが、全財産か何かと思っているのだろう。子供には手にしたことのない金額だつたらしい。

「服や食事や他にもいるだろう。……特にミラは生理用品とか」

「へ、変なこと言うなバカア！」

「ミラ姉、せいりつてなーに？」

「……お、大きくなつたらリサーナにもわかる」

妹に聞かれてはぐらかすように答えるミラ。同じくわからないエルフマンは聞くべきか聞かないでおくべきか迷つたように困つた顔でその場に佇んでいた。

そう。ただの気まぐれだつた。別に理由などなかつたのだ。ミラ

とリサーナ、エルフマンを拾つたのは。

同情でもなく、哀れみでもなく、親切でもなく。

俺の心から抜け落ちた何かを埋めるためでもない。

失つたものは二度と取り戻せないように、一度空いた穴を別の何かで埋めることなど到底出来はしないのだから。

テイクオーバーの使い方

突然の出来事だった。両親が死んで、この世界に弟妹と三人残されて、露頭に迷うことになった。家はあつたけどお金はなくて一番年上だつた私が働いて日銭を稼ぐしか道がなく、また私もリサーナとエルフマンを捨てて一人逃げ出すなんて以ての外だ。だから、三人分の日銭を稼ぐために悪魔退治をした時、運が悪いことにしくじつてしまつた私は腕が悪魔に侵されたとそう思つた。

異形の腕になつてしまつた私はリサーナとエルフマン共々村を追い出され、仕方なく身一つで流浪の旅に出て、色々な村を周りその日をどうにか教会の屋根の下で過ごすしか雨風を凌ぐ方法は知らなくて。また異形の腕のせいで追い出されて、流浪の旅を何度も繰り返した教会の中で疲れ果て眠つっていた時だつた。扉が開いたのと、光が差し込んだのは。

——私の前にあいつが現れた。

癖のある黒髪、翡翠の瞳、その裏にある何処か悲しそうな雰囲気の人。

その人は露頭に迷い、困つていた私に手を差し出した。

食べ物をくれた。——それもあんなにおなかいっぱい食べたのは久しぶりだつた。

服をくれた。——何日も旅をしていたから、清潔な服は久しぶりだつた。

住むところを与えてくれた。——暖かいベッドで眠つたのは久しぶりだつた。

その日は、何でもなかつたはずの日常がこんなにも幸福なものだつたんだと今更ながらに実感したわけで、三人一緒になつてわんわん泣いたのは恥ずかしながら姉失格だと思う。

そりやこんなところで捨てられても困るし、旅の途中の宿で私達と

あの人で部屋を分けられそうになつた日には不安で無理やり同じ部屋を取らせました。私とリサーナがお風呂に入る時、いきなりいなくなられても困るからエルフマンにあの人を見張らせたのは少しやりすぎだつたようにも思う。

彼の家に着いても大変だつた。

部屋をくれたり。大金をくれたり。大凡、私達が生きる為に必要最低限以上のものはなんでも与えてくれて、至れり尽くせりというか申し訳ないというか……信用してないわけではないけど、後が怖い。私達はこのまま幸せになつていいいのか不安になつた。

ギルドのメンバーも紹介された。――といつても、あの人人が面倒そうに席を外している間、勝手にギルドの奴らが私達に話しかけてきただけで私としては別によろしくしたいわけでもなかつたけど。

今更になつてあの人人の名前を知らないことに気づいた。

そんなこんなで養われて一月程。

「……あれ、私達つて負んぶに抱っこで完全に役立たずなんじや……？」

私はダメ人間に近づいている気がした。



『ローゼン・フラメル』18歳。男性。

癖のある黒髪、翡翠の瞳、身長もそこと高く今の私は見上げないと無理。S級魔道士で魔法を使うのを殆ど誰もが見たことないらしい、使用魔法は不明。それ以外は戦斧を振り回して戦うスタイルで近接戦闘だけでも強いらしい。月に何度も仕事を請け負いギルドを離れることもしばしばある。……と、私も一ヶ月間何もしてなかつたわけではなく、そこそこ彼のことは調べている。

彼の名はローゼン。彼がギルドにいない時、暇な私はそれとなくギルドの人達に色々と聞いて回つてみたが案外情報が少なくて知れることなど多くはなかつた。何が好きとか、嫌いとか、そんな情報すらないのだ。それ以前に誤情報。ローゼンは二日に一回しか帰つ

てこない。

お金は置いて行つてくれるから衣食住は完璧なもの、いくら私も
も気づくことはある。ローゼンは私達を避けている。仕事に行かな
い日は普段家にいると聞いているのに、全然いない。私達が気を遣う
どころかむしろ気を遣われている。

……それともあれか？女か？女の家に泊まっているのか？

その根拠がこれだ。

「ローゼン、今日も手合わせ願えないか？」

「……いいぞ」

毎日、赤毛の……名前はなんと言つたか。エルザ。そう、エルザだ。
私とそう変わらないくらいの歳の女の子の誘いに乗つて、剣の修行
に付き合つてやつて いるらしい。

ローゼンが帰つてくるたびに剣の手合わせを願つてやがる。

あいつ、隙あらばいつもローゼンと仲良くしてやがる。……なんか
羨ましい。

「おっ、また始めるのか」

「今日こそはローゼンに魔法使わせられるか」

「無理だろー。まともに魔法使わせられたの、ギルダーツくらいだろー」

「何戦何敗だつけ？」

「今やつてるのがちょうど百戦目で九十九敗だ」

そうこうしている間に二人は手合わせを始めてしまつた。ローゼ
ンは巨大な戦斧、エルザは様々な武器を魔法によつて換装して戦うシ
ンプルながらもとても強い魔法で。

時に素早さで翻弄したり、パワーで撃ち合つたり、手数で押したり、
エルザは武器の数ほどの戦法を駆使するがそれを戦斧とフイジカル
だけで上回るのだから、根本的な強さの違いがわかるというもの。呆
気なくローゼンの勝利で終わつた。

「……つ、強くなつたつもりなのだがこれでもダメか……」

「ありがとう」というエルザの言葉を聞くまでもなくローゼンは隅の
席に移動してしまつた。エルザには構つてゐのにこつちには構つて
くれなくて、私は席を移動してローゼンの隣に座る。彼は本を読んで

いた。

「なあ、ローゼン」

反応はないが話は聞いてくれている。ここ数日でわかつたことだが、これがデフォルトつてやつらしい。

「……その、私に魔法を教えてくれないか？」

私がエルザのよう構つてもらえるとしたらそんなことくらいしかない。それにもうお世話になりっぱなしは嫌なのだ。だから、魔道士として働けて、正式にギルドの一員になれるように頑張ろうと思った。この魔法が少なからず嫌いだけど、そうするしか選択肢はありません残されていないだろう。

本をパタリと閉じて、数秒目を瞑りローゼンは何処かを見据える。ダメだつたか……と、邪魔した謝罪をしようとした時、不意に彼がぼそりと何かを呟いた。

「――これが一部だけを変化させる〈接収〉だ。まず基礎の基礎だな。これが制御できて第一段階だ」

そう呟いたローゼンの頭には白い狐の耳。腰辺りには、白い尻尾が生えていた。

「……え、なんか可愛い」

思わず本音を漏らせばローゼンは無言で固まつた。フリーズだ。少しきゅんときてしまつたが、それはしようがないだろ。あのローゼンが狐耳に尻尾だ。

「なあ、触つていいか？」

「……断る」

「触つてみないとよくわからない」

「……好きにしろ」

なんとか触る許可を貰つて耳と尻尾に触れてみる。もふもふしていく手触りが良くて、思わず何度も何度も撫で回してしまうのは不可抗力だと思う。ローゼンはとても気難しい顔で座つてゐるが、私に触られて嫌ではないらしい。尻尾に抱きついたりしても怒る様子はまったくないので、満足するまで頬擦りしてから離した。

「なんていうか、本物みたいだな」

「ティクオーバーはただのコピーではないからな」

「コピーじゃない？」

「本物を吸収して使役するんだ。元となつた動物は宿主と生命を共にする。分離する方法もあるがな」

「げつ、てことはあのキモイ目玉の腕も生きたやつ使つてんのかよ」
思い出すだけで身震いしてきた。その点、ローゼンの接收は可愛いのでいいな羨ましい。

「そして、部分的接收の先——」

ローゼンの身体を光が包む。

「——これが全身接收だ」

光が収束して、姿を現したのは。

椅子に礼儀正しく座る、白い狐だつた。

人間のサイズではない。普通の動物サイズ。もふもふした毛並みは艶やかで品のある上質そのもの。翡翠の瞳は彼の証だろうか、人間の時の名残がむしろ愛らしい。

「つ、可愛い！」

そう叫んだのは誰だつたのか。私ではない。いつのまにか隣にいたリサーナだ。

「いっしょにあそぼつ」

「キュッ!?」

白狐姿のローゼンを拉致して走り出す。両腕で抱いてエルフマンやエルザに見せに行く。

羨まし……じやなくて、早く追いかけないと。

私も抱つこしたいと言う前に、取り返さなくてはならない。

「リサーナ！」

私は慌ててローゼンを奪還しに行つた。

結果を言えば、ローゼンを取り返す事に成功した。危うく子供達の玩具にされそだつたがそこは熟練の魔道士がなせる技か全然捕まらず壁際に逃げてエルザの手に墮ちようという時、割つて入つた私の肩に飛び乗るとマフラーのように巻き付いてきた。あの殘念そうな

エルザの顔は少し気分が良かつた。

少しで良いから抱かせてくれ、と頼んでくるあいつ割と動物好きなんだなあと思つたが貸すわけにはいかない。それは何より私が面白くない。

「……ほんと災難だよな」

思わぬ利益で抱っこできたので得をした気分で椅子に座る。あとでリサーナは褒めてやろう。

名残惜しいが白狐は椅子に飛び移るとローゼンの姿に戻った。「やろうと思えば質量のコントロールさえ可能なのがこの魔法の特徴だ。変幻自在、故にどんなものだろうとなれる。だが、それをやると騒ぎになるのでやめておこう」

彼はまだ何か魔法を隠しているらしかつた。

私も追求したいわけではないので、しつこく聞くことはやめた。

「……さて、ここまで講義をして今発動しようと言つて接収を発動できるか？」

「んー。……無理、全然わからん」

試しに接収を発動させてみようとすれば何かもやつとしたものが蠢くだけ。魔法そのものは発動しない、それに抽象的に説明されたつて魔法の発動自体わからぬのにどうしろってんだ。

「ならわかりやすく教えてやる。手を出せ」

「えつ……」

手を出せと言われて思い出したのは、初めて会つた時にされた手の甲へのキスである。顔を真っ赤にして身を引いてしまうのは仕方のないことだとと思う。

ローゼンは強引に私の手を掴むと?ぎ合わせようとした。が、もともたと何かを躊躇しているようで、焦れつたいだかなんだか私から指と指を絡めてやつた。

「ふふっ。……ローゼン女の子と手を握つたこともないの?可愛い」「ある。煩いマセガキ」

——それはエルザか?

思わず拗ねて手を離そうとした不機嫌な私の手を強く握り逃さな

かつたローゼンの男らしい力強さに少しどキッとして、慌てて言い返す。

「私もう13だからガキじゃねー」

「ガキだな、自分一人で生活できないような奴は」

「ちよつ、人が気にすることを!」

「一生養つてやろうか?」

「私をいつまでもガキ扱いすんな。今に見てろ」

15歳が成人扱いなので正直に言うと彼からしたらまだ子供なのだろうが、私はなんとなく納得がいかない。

「まずそのためには魔法を使うために魔力の存在を知るところからだな」

手を握り合い至近距離で見つめ合つてしまふような形でいるものだから、冷静になつて考えてみれば少し恥ずかしくなつて目を逸らしてしまふ。

「……なにすんだよ」

「まず魔力を知覚しなければいけないんだが、手つ取り早く注ぎ込む事にした」

「……は?」

「取り敢えず、感じろ」

いやちよつと待つ——。

「——ひやん!」

繋いだ手から膨大な量の液体のような何かが流れ込んできた。

思わず嬌声を漏らしてしまつた私は身悶えてプルプルと震えていた。

魔力注入を一旦停止させられたのがわかつたが……。

いきなり身体の中に流れ込んできた慣れない感覚に未だ動けない。

ギルドのみんなはこつち見てるし。おっさん連中はニヤニヤしてやがる。

「すまん。加減を間違えた」

「絶対わざとだ」

「ほんの一滴のつもりだつたんだがな」

「……あれで一滴？」

「それは置いておけ。で、どう感じた？」

「……そりや、まあ、水みたいな」

「イメージとしてはそれでいい。空氣中にも元となるものがあるが……まあ、今は必要ない」

つーかいきなりなんだもん。びっくりしてあんな声が出るのも必然。今度は「もう一度だ、感じろ」と言われたので魔力が注がれるのを待つた。暫くして、森の葉から一滴の雫が落ちたように身体中を魔力が波紋していくのがわかつた。

「……これがローゼンの魔力？」

何故だろう。とても冷たくて、哀しくて、暗い色をしている。

目の端から流れ出る温かい水滴は最近も流したものだ。手で拭うと思つた通り、魔力ではなく涙だつた。
なんで泣いてんだろ……。

ぐしごしと目元を拭うと彼は淡々と言う。

「なら、次は自分の魔力を探せ。流れる先を辿ればわかる」

言われた通り探し探せば、自分の魔力が自分の体を巡つてているのを感じることができた。

「……そこまでできたならあとは簡単だ。腕に魔力を集中させろ」

「そう言われても、これが、なかなか、うまく…？」

やつぱりダメで匙を投げかけるとローゼンは仕方ないと言うように握つた手とは違う手で私の手の甲に指を添えた。

「こればかりは感覚で掴むしかないからな」

「いや、なにやつて……ひや、くすぐった…！」

またいきなり。繋いだ手とは反対の手で手の甲から手首、腕となぞる。しかも手はしっかりと繋いだままだから逃げようにも逃げられない。

「ちよつ、さつき可愛いくて言つたのは謝るから……！」

これが〈接収〉を会得するまで延々と続いた。

ランクS

ミラジエーン・ストラウスが魔道士になつて半年。徐々に確実に強くなつていく彼女の成長は子供故の吸収力というやつだろう。依頼を幾つも成功させ自信に満ち溢れているそういう時期だ。

月に二度大きな仕事をして他の時間を別の事に費やすのが生活サイクルの一部となつている俺がその大きな仕事を終えてギルドへと帰つて来た時、真っ先に出迎えるのがミラだ。

「おかげり、ローゼン」

「……ああ、ミラか」

長年「ただいま」と言えてないので苦手になつてしまつた言葉を黙殺し駆け寄つて来てくれたミラに生半可な返事をして、マスターへと仕事の達成を伝えに行く。背後にはちよこちよことミラが付いて來た。

「まだ話は終わつてないぞミラ！」

「ああ？ もういいよそんな話」

さつきまでエルザと喧嘩をしていたようだが、ミラの興味は他へと移つていた。不完全燃焼で釈然としないながらもエルザは引き下がつていく。彼女の中の熱も冷めたのだろう。「ああ、またか……」と諦めた表情をしていた。

「今回もご苦労じやつたの」

「然程難しい依頼はしていない」

マスターの前へと辿り着き、社交辞令的な労いの言葉をかけられる。

「これは会話の切り口に過ぎない。」

「他の奴らは簡単な仕事でも物を壊したり問題を起こして帰つてくるから胃が痛いわい。特におまえさんに引っ付いてる娘とかな」「ちよつ、マスター！」

「建物の倒壊六件、器物損壊三件、そりや魔道士になつて一年も経つて

いないから仕方ない事だと思うが……おまえさんと仕事に行く時だけじやからなあ。いい娘でいるのは」

親の仇みたいな目でマスターを睨み付けるミラに視線を移すとなるとも言えない表情になり、彼女はゆっくりと俺から視線を逸らした。頬は薄つすらと赤い。マスターはそんな態度ですらも微笑みで受け流している。

「ミラ」

「……脆い建物が悪い」

そっぽを向いて拗ねた子供のように言い訳を述べる。チラチラと此方を確認するところが、まるで親に叱られるのを気にしている娘のようだ。

「やつてしまつたものは仕方がない」

「じゃあ、一緒に依頼受けてくれるって話は！」

ほぼ毎日のように一緒に依頼に行きたがるので『良い子にしていたら』と約束してある。喧嘩等は仕方ないとして、彼女の懸念は全力でそこに注がれていたようだ。

マスターには「甘い」と言われたが別に甘くしているつもりはない。子供のように喜びはしゃぐミラの様子を見て、頬は確かに緩んでいるが。それはマスターとて同じだろう。……いや、語弊か、ニヤニヤしてるのが無性に腹がたつ。なんだその温かい目は。我が子を見守るような……。

「じゃあこれ、明日ギルドに朝早く集合で！」

依頼書を片手に早口に伝えると上機嫌でギルドを出て行く。一緒に住んでいるのだからわざわざ待ち合わせする必要はないというのに、何故待ち合わせる必要があるのか。

——ミラジエーンが未熟だと言われる所以は、俺と一緒にいつまでも依頼をしたがるところにあると思う。

◇

そして、ミラが魔道士になつて二年程。

「なあなあ口ーゼン、一緒にこの依頼受けよーぜ」

まだミラは一緒に依頼を受けたがっていた。他の魔道士はチームを組まない限りは一人で仕事をするのが常だというのに、いつたいこの娘は何時になつたら独り立ちするのやら。椅子に座つて魔導書籍の解析をしている俺の背中に凭れ掛けり、首に腕を回し、拳句には胸を押し付けるような恥じらいの一欠片も持ち合わせない行動。顔の横に顔を出して耳元に甘える子猫のような声で囁くものだから、妙な背徳感が背筋を撫でた。

——だいぶ大きくなつたな。……ではなく。

「ミラ、前にも言つたがそれはやめろ」

「悪い気はしてないだろ」

「……依頼に行つてやるから、離れろ」

「えー、やだ」

甘やかし過ぎたのかミラは度々不満を漏らすようになつた。昔は素直で良い子であり言うことなんでも聞いたが、今や遠慮というものが知らない駄々つ子だ。

「……」

黙つて魔導書の解析を進める。

「……」

ミラも黙つて魔導書の解析を眺める。

そしてその光景を遠巻きに眺めるギルドメンバー達。

「……っ」

落ち着かない。魔導書の解析も進まない。

前に無理矢理引き剥がしたら悲しそうな顔をしたからこのままにしているが、もう限界だ。

特にギルドの者達の顔色が若干気持ち悪いことになつていて。

そんな中、俺とミラにトテトテと歩いてくる青い猫が一匹。そいつは口元を抑えてニタニタと笑いながらこう言つた。

「ドウエキテルウウウ～～～」

新手の呪文か妙な発音だ。猫特有のものだろうか。ハツピーはクププと笑つてゐるが、ミラはその呪文の意味がわかつたのか顔を真つ

赤にして猫を追い払つた。一目散に逃げる猫。

「……俺は帰る」

ギルドの居心地が妙に悪いので立ち上がる。ミラはそれでも首に引っ付いたままだ。

二階への階段を横切つて出口へと向かつている時、ふと視線を上に向けた。二階にはS級魔導士しか受けられない依頼書が置いてある。その依頼書は高難度なもののが報酬は破格。その中でも報酬の中には貴重な魔導書などがある。古の遺産だつたり、中身は様々だが。そう言えば最近確認していないな、と思い出した。

階段へ足を掛けるとミラは首から離れた。さすがのミラもマスターの『S級魔導士以外が二階に行つてはならない』という言い付けだけは守るらしい。その調子で纏わりつくのも勘弁して欲しいがそこだけは何故か妥協しないのだ。

二階で貼り出されている依頼書を確認する。

珍しい事に、かなり貴重そうな魔導書が報酬として提示された依頼があつた。

それにS級の依頼書の中では比較的簡単な方の仕事。

クエストボードから依頼書を引き剥がすとそれを持ってミラの所に戻る。

「……また一人で仕事？」

「……来るか？」

「えっ!？」

ミラは大きく驚いた。これまで高難度の依頼書の仕事を引き受けた時、ミラを連れて行つたことはないからだろう。それにS級でない魔導士の同行はS級魔導士の許可が必要である。

「S級の依頼に連れて行つてくれるのか?」

「おまえにもできそうな依頼だからな。……少しはより高い所を見てみるのも、いいかもしけないとと思つただけだ」「嘘じやないよな！」

何故疑う。と、此方が疑問に思つた頃、ミラは子供のようにはしゃいで他の面子に自慢しに行つた。

「ずりいぞオレも連れてけー！」

「ナツが行くなら俺だつて！」

……そうなればナツとグレイの氷炎コンビが喧しくなるのも当たり前である。

「ちよつ、連れて行つてもうのは私だけだぞ！」

「ミラだけずりーだろ！」

「ローゼン俺も連れて行つてくれよ」

「断る。面倒だ」

暴走するのが目に見えている上、勝手な事をされても困るので絶対に連れて行きたくない。ミラだけならまだ言う事を聞いてくれるのを問題はないだけで。

そのミラといえばさつきまでの上機嫌が天元突破して余裕の表情で一人を軽くあしらつている。

「おまえらまだガキだからダメだつて」

「ガキじやねえ。バカにすんな！つーかそれならミラだつてまだガキだろ！」

「私はこの前15になつたからガキじやないですー」

「……そういうわけだ、諦めろ。ギルダーツにでも連れて行つてもらえ」

「諦めろ、ナツ。邪魔すんのも野暮だしな」

最近、妙にギルドメンバーから話しかけられるのはきつとミラが原因に違いない。

「あい。そうだよナツ、邪魔しちゃ悪いよ」

「でもよー、ハッピー」

「ナツがS級になる方が早いよ」

「そもそもそうか」

「ハツ、おまえより俺が先だ！」

「なんだとグレイ！」

また喧嘩を始める氷炎コンビ。……その背後には、鬼がいた。

「その辺にしておけ馬鹿ども。ローゼンの手を煩わせるな」「「あい……」

エルザに引き摺られて二人と一緒に元の場所へ戻っていく。彼女とはよく話す事もあつてかギルド内では割と仲が良い方で、対照的にミラとは仲が悪い。

「それでローゼン。S級の依頼ってなんなんだ？」

「ああ、これだ」

渡された依頼書の内容をミラが読み上げる。

「えっと……闇オーフション会場への潜入？」

「何をするのかはつきりと書かれてはいないが、S級にはS級なりの理由がある。おそらく、いや……もしかしなくても闇ギルドと事を構える可能性は十分にあるというわけだ」

「……怪しくねーか、この依頼書」

「よくわかつたな。ミラ」

「いや待てって、なんでそんな怪しげな依頼にしたんだよ。詳細は直接会つて話すつて……」

「しかしそこも罠、という可能性は極めて低いだろう。依頼をしてまで闇オーフションの所在を明確にする理由がない」

「まあ、確かに……私そういう頭使うのは苦手なんだけど」

「少しば用。……生き残る為にはそういう事も必要だ」

討伐系の依頼ばかりこなしているミラはそういう腕っ節が必要な依頼を好み、他の仕事には目も当てようとしない。もつともそれは彼女らしい生き方というものだ。口を挟むつもりもない。

やがて読み進めていくミラがある一行に目をつける。少し頬を赤くして、上目遣いに俺を見上げた。

「その…男女ペアの方がいいって…」
依頼書にはこう書かれていた。

『異性と組み仕事を受けるべし』と。

「…その、それは…私が良かつたってことか？」

「…おまえ以上に信頼できるやつなど、そうはないからな」

求めていた答えだったのかはわからないがミラは満足げに頷いていた。

◇

依頼主の名は『ベルトルト・ガードナー』この時代における金持ち貴族というやつだった。貴族らしくギルドホームよりも大きいのではないかと思われる豪邸に住む、その街近隣の盟主らしい。依頼を受ける前に噂を聴き込んだところ、家族構成は三人、妻と娘と暮らしているらしく、そして近隣の住民達に慕われる人物だという情報があり、依頼主として怪しいところはなかつた。

そのガードナー家に足を運んだ俺とミラは応接間へと通され、夫妻に話を聞いていた。

「……娘を取り返して欲しいのです。拐われた娘を、どうか……！」

話を要約するどころらしい。娘が数日前に誘拐され、なんとかして足取りを掴むもそこは危険極まりない闇オーケーションが行われる市場で、容易には足を踏み込めないのである。娘を助ける為に情報なら何でも揃えたが、生憎と埃を叩いて出てくるのは状況が一方的に悪くなる報せのみで、自力で頑張ろうとしたが断念したらしい。

そこで魔導士ギルドに依頼が飛んできたわけだ。

闇ギルドが多く集う闇オーケーションでは、人身売買や闇の書、禁呪指定魔道具、その他危険物資の取引が行われているらしく、闇ギルドの規模が強大過ぎるのだと。

厄介なことに、娘を誘拐するよう命じたのは同じく貴族の者で、ガードナー家を疎んでいる者の仕業だと。最近、結婚を迫ったのを断固拒否すればそれから数日のうちに拐われたので、拐つた賊に多額の金を積めば、その手のものが依頼者だと情報だけはくれたらしい。……もつとも娘は帰つてこなかつたが。

「今現在の安否の保証はできないが、取り返してくると約束しよう」

「そ、そうか。頼まれてくれるか！」

危険度の高い依頼だつたため、ギルドから魔導士が駆け付けても半信半疑だつたガードナー卿の目に絶大な信頼の灯火が点火。

「私も助力は惜しまない。隣の部屋に正装を用意したから、一着貰つて行つてくれ。敵の目を誤魔化すにはちようどいいだろう」

隣の部屋に通されれば、上品なスーツやドレスが所狭しと並べられており、メイド達も手伝つて全員が変装に全力を注いでいた。本当に協力を惜しまないつもりだつた。その上、ガードナー家の名でオーナー シヨン会場に侵入する手筈も整つているという。

「……さすがに複数の闇ギルドを相手に事を構えるのは不可能と判断したか」

何も無理矢理取り返してくれ、とは頼んでいない。娘が帰つてくればそれでいい。そう判断したか。だが、あと一步がどうしてもどうにもできずに困ついたらしく、魔導士ギルドに頼まざるを得なかつたか。……少なくとも、彼らの話に嘘はない。準備が良過ぎるとは思つたが、それも確認済みだ。

「旦那様、奥様の支度が整いました」

着せられるまま高級なスーツに身を包むと『夫婦』という設定なのがミラが別の部屋から現れる。振り向いたその時、俺は不覚にも不意を突かれてしまった。

「……ど、どうかな、ローゼン」

そこには、真紅のドレスを纏つたミラがいた。

「……」

いつもの露出高めのラフな格好とは違い、膝が露出しない程度の丈のスカート、胸元の薔薇のように咲いたフリル、それも袖がなく肩紐の類も存在しない鎖骨が完全に露出していく……辛うじて胸元だけは隠れている状態だ。こういうドレスを何と言つたか？とにかく、その色合いも含めてミラの魅力を全面的に引き出していた。

「や、やつぱ似合わないよな…」

「……そんなことはない。綺麗だと思うぞ」

「絶対嘘だ。さつきの間は何だよ」

突然、怒り出すミラ。と、思えばスカートの裾を引っ張つて少し頬を赤くして、文句を言い始めた。

「それにこれ……足元がスースーするし、なんか落ち着かねえし」

いつものミラじゃない。恥じらう姿がとても可憐な花のようになじられた。

「……」

こんなミラも可愛いなとは思つても絶対に口には出さないと、危うく出かけた言葉を呑み込んだのだった。

魔神を冠する娘

早速、問題が一つ。慣れないドレスとヒールを履いたミラは早々に転びそうになり、闇オーケーションを内包するパーテイーの時間まで即席の練習することになった。娘の命が懸かっていることもあつてか夫人はミラにヒールの歩き方やダンスの仕方などを猛特訓させ、それなりに上品な振る舞いというものを習得した。

そして、刻限が迫り夜の帳が落ちる頃、慣れないヒールに戸惑いながら歩くミラに腕を貸しながら、会場となる豪華客船に乗り込む。船内には既に数多くのパーティ客が乗船しており、闇ギルドらしき粗暴な者から品の良さそうな貴族までが点在していた。見渡せば人集りばかりで大きな問題を起こして逃走を図るには困難極まりなく、あの夫妻が来たならば確実に逃げ延びるなど困難なことが予想出来た。

「……思つてたより多いな。それに乗船もスムーズだつたし、よく私達が正規ギルドだつてバレなかつたよな」

本来、闇ギルドの者ならそのシンボルであるギルドの紋章を提示する。それが入場の条件だ。だが、貴族として潜入したミラと俺はギルドの証を提示しなくてもよく、ギルドの紋章さえ見せなければ身バレすることは少ない。

そのギルドの白い紋章がミラのは左ももにある。完全にスカートに隠れており、少し捲り上げれば危険な位置だ。

「不用意なことは言うな。誰が聞いてるかわからん」

「そ、そうだよな……ごめん」

何処に耳があるかわからない状況で不用意な発言を控えるように叱咤され、ミラは俯いてしまつた。

そこにじーっと俺の顔を覗き込む、女がいた。

「あー、ローゼンだ。会いたかつたゾ！」

天使のような格好……と言えばいいのだろうか。一見して、胸開きの素肌全開のはしたない格好をした女性が、俺につっこりと笑いかけ

て全面的に好意を示してくる。

「……誰だよ、その女」

「誰だよその女、はこつちのセリフだゾ」

明らかに不機嫌になつたミラと睨み合う女。年頃としてはミラとほぼ変わらないだろうか。説明を求める、と俺に二人の視線が集中するのもそれは必然。だが、俺は脳内の記憶の詰まつた書庫をひつくり返し膨大な記憶を引っ搔き回しても誰だか思い出せないでいた。検索範囲を広めよう、この女を少し幼くしてみるのだ。随分昔に会ったのかもしけん。

「…………ソラノか？」

検索結果。もつとも似ている人物から名前を出してみた。

「覚えてなかつたらお仕置きしてるとこだつたゾ♪」

そのお仕置きが俺に効くかどうかは不明だが、及第点はクリアしたようだ。

「でも、まさかこんなところで会えるなんて思つても見なかつたゾ」

その言葉の意味は言葉通りでありながら、もつと深い所にある。

「…………まさか、正規ギルド『フェアリー・テイル』のローゼンがいるなんて？」

「!？」

この言葉に動搖したのはミラだつた。即時、警戒態勢になり魔法を発動しようと魔力を熾す。しかし、それはミラの頭をポンと撫でるだけで霧散する。

「それで、なんでソラノがここにいる？」

「ローゼンはお仕事だよね？私は闇ギルド『六魔将軍』の一人だからだゾ」

「闇ギルド」という言葉に過剰反応するミラ、しかし俺がもう一度頭を撫でると警戒した目をソラノに向けるだけで若干の不満はあるものの引き下がる。

「そんなに警戒されても別に私は何もしないゾ

「し、信じられるかよ……そんなこと……」

「ローゼンは私にとつて恩人であり、魔法を教えてくれた師でもある

からね。それと、今はエンジエルってコードネームだから控えてほしいゾ」

——と、言いつつ鍵を取り出すソラノ。

魔法の触媒かとミラが身構える中、タクトを振るように鍵は振るわれ軌跡を描く。

「開け、双児宮の扉——ジエミニ」

一瞬、光が満ちた。輝き船内を照らす光が晴れた後、宙に浮かぶのは人形のような星靈。

「ジエミニ、コピー」

ポンつと音を立てて、煙が上がる。

ジエミニと呼ばれた星靈が消え、そこには——。

「……え、ローゼンが二人!？」

俺と瓜二つの人間。格好も、何もかも、同一の俺にミラは隣にいる俺と目の前にいるジエミニを見比べた。

「ふふつ、コピー完了。もうコピーは一生変えないゾ」

『満悦なソラノは星靈門を閉じ、ジエミニを星靈界に帰した。

「さてと、これは口止め料つて事で』

「随分安いな

「むしろ私が払い足りないくらいだゾ。どうせ目的がなんであれ、ローゼンの邪魔をしてもこんな連中、相手にすらならないだろうし」

「賢明な判断だな』

「私もローゼンに恩を仇で返すような事はしたくないゾ』

交渉は成立した。元々、あつてないような交渉だが、少なくとも彼女は協力的らしい。

「オークションで出品される少女について何か知らないか?』

「うーん。……少なくとも、まだ仕入れはないなあ。危険な禁呪指定の魔道具なら厳重に管理されてるけど』

「そうか。取り敢えず、探つてみるか』

「あー、あまり警備が敷かれてる場所に近付き過ぎると警戒されるから気をつけるんだゾ』

◇

それから数時間、船内を捜索した。しかし、探し人は見つからず。やはり警戒した闇ギルドの連中にマークされながら澄ました顔で一度用意された部屋に立ち寄り躲し、ただの乗客を装い、会場に二人で戻れば立食形式の料理に舌鼓を打つているミラと隣り合いながら乗客達へと視線を移していく。ワインの入ったグラスにさつきから尾行してくる闇ギルドの連中が映っていた。

「ふむ。やはり警戒されたか」

「……私はもうエンジエルってやつと会つた時点で詰んだと思つたけどな」

「もしそうなら、闇ギルドの連中を全員捩じ伏せた上でゆっくり捜索するつもりだつたがな」

「……そんな自信ねえよ」

「安心しろ、おまえにできなくても守つてやる」

連れてきたのは俺だからな。と、責任に対しても普通に対処したつもりなのだが、ミラはそんな言葉聞いてないという風に皿の上のパスタを胃の中に収めた。

「パーティーも中盤、焦つても仕方がない。目的のオーケーションまであと何曲か。踊ろうか」

「……え、あ、ああ」

手をミラに差し出す。差し出された手に戸惑いつつも手を取ると流れるようにダンスしている客達の中へ紛れ込んだ。一瞬、腰を抱いて体を近付けた時に強張りがあつたがゆっくりと深呼吸することで対応する。頬を赤くしたり、きやつと小さく悲鳴をあげたり、しかし踊り始めると流麗なステップで優雅に踊る彼女は割と物覚えが良いのかも知れない。

「……さつきから様子が変だな」

「変つて？ 私にはわかんないけど」

「違う。ミラ、おまえだ。体調が悪いなら、俺一人で片付けるぞ」

「別にそういうんじゃないなくて……ローゼンは、その、なんとも思わない

のかよ？」

「何がだ？」

「……その、私とこんな密着していく」

改めて自分達の置かれた状況を俯瞰してみる。手を繋ぎ、お互の腰に手を添えて、時々体の一部が触れ合つたりしている。なるほど、年頃の娘としてはそういうのを気にする歳頃か。

「嫌なら、ダンスを止めるが」

「いや、そうじやなくて……」

何か言いたそうに俯く。その顔を見て、表情について考察しようとした時、不意に照明が消えた。

「レディースエーンドジェントルメーン！ 紳士淑女の皆様、ようこそお越しくださいました」

照らされる、ステージの方。そこには一人の道化。一身にスポットライトが当たる男はマイクを片手に陽気に礼儀正しく戯けた感じでお辞儀をしてみせた。

「今宵、皆様お待ちかねのオークションには世にも珍しい珍品がずらり！ 貴方がお探しの商品もあるでしょう！ おっと、紳士の皆様ご期待の麗しい玩具も取り揃えています」

道化の声に会場全体が一斉に拍手を送る。

それに気を良くした道化はもう一度頭を下げた。

「長話も退屈でしよう。では、早速張り切つていきましょ！」

ステージ横から檻が運ばれてくる。その中には、首輪と足枷を嵌められた金髪の少女が一人。前座だろう。その少女は依頼内容として聞いていた通り、写真で確認済みの顔と一致した。

「まさか最初から出るとはな。待つ手間が省けた」

「でも、この状況で連れ出すなんて……」

「確かに出港してだいぶ時間が経つ。だが、これ以上依頼主に心配させるのもあれだ」

ステージの上へ一足飛びに降り立つ。一瞬にしてステージ上に現れた俺に客は目を白黒させた。その間にも知った事かと戦斧で檻を斬り払う。首輪と足枷を破壊し、少女を抱え上げた。

「あ、あの……お客様？」

「気にするな。それとも、船ごと仲良く評議員に出頭するか？」

仕事の邪魔だと道化を睨む。もう既に危険な魔道具のリストは評議員に送つてあるので、今頃は逮捕のために大勢の兵が岸へと押し寄せている事だろう。もちろん、エンジエルの姿はない。逃げたか、利口な判断だ。闇ギルドもそれくらい聞き分けが良ければいいのだが、そうは問屋が卸さないのが現実らしい。

「楯突くか？それもいいだろう。ミラ、暴れていいいぞ」

この日、闇ギルドが2桁壊滅。

押収品は100に登つたらしい。

しかし、恐ろしい事に何処までやれるか見守るつもりで任せていたら、八割は一人で壊滅させてしまつたのである。

俺はこの日、ミラは極力怒らせない事に決めた。



依頼達成報酬を依頼主から受け取り、少女を帰した後、ギルドには寄らず家へ直行。依頼報酬の魔導書の解析を進めたいがため自室に籠ろうとしたら、リビングにはまだリサーナとエルフマンの姿があつた。

「ミラ姉、ロー兄お帰り」

「姉ちゃん、兄ちゃん、お帰り」

長い年月の間に二人は俺を兄と慕う様になつた。二人共立派な魔導士になり半年程が経つが、基本はミラと一緒に依頼に行くため今は留守番をしていたようだ。

「それで姉ちゃん、S級の依頼どうだつた？」

男としてS級は憧れなのか目を輝かせて内容を聞くエルフマン。しかし、ミラ本人は少し疲れた様子でぐでっと机に突つ伏していた。

「んー。……もうダメ、無理。寝る」

そもそもそのはず、魔力が空になるまで大暴れしたミラは体力的にも魔力的にも限界だった。流石にギブアップというところで俺が最後

の後片付けに割つて入つたのだ。それまではミラに闇ギルドの軍勢を相手に何処までやれるか手を抜いて加勢していたので、疲弊しきつているのである。

「あらう、本当に寝ちやつた。ミラ姉ー、そんなところで眠らないで部屋に行きなよ」

くーくーと可愛い寝息を立てて眠るミラ。

リサーナが振り起こそうとしても、起きる気配がない。

「仕方ないなあ。そうだ、ロー兄シチューベー食べる？」

「……いただこう」

「じゃあ、ミラ姉を部屋に運んであげて。温めておくから」「いいや、リサーナ。ここは漢の俺が。兄ちゃんだつて疲れてるだろうし」

「エルフ兄はダメ」

「……いや、ダメとかじやなくてだな」

誰がミラを運ぶか喧嘩し始める二人。しかしそれくらいの労力、拒む理由もない。

「俺が行こう」

「だ、だけど兄ちゃん……」

「もう、エルフ兄は黙つて！」

ついに妹に押し切られてしまうエルフマン。姉を運ぶか、妹の言う事を聞くか、天秤に掛けた結果どちらの言い分も尊重すべきものとして認識しているらしく、結局押し黙つて椅子に座った。

椅子に座つてテーブルに腕を重ね器用に寝入るミラを横抱きにして、ミラを部屋へと運ぶ。ベッドに寝かせると布団を掛けて、戻ろうとしたところで袖に違和感を感じた。振り返るとミラが袖を掴んでいたのだ。しかも寝ながら、という奇妙な状況に優しく解き腕を布団の中に戻しておく。

今度こそ、リサーナとエルフマンのところへ戻つた。

「……ねえ、ロー兄」

「なんだ？」

「ミラ姉と何かあつた？」

いきなり妙な質問をされて、返答に困る。

逡巡し今回の依頼中の出来事を思い出してみたが、特別な事など何もない。

「どうしたんだ急に」

「だつて、ミラ姉いつもより機嫌が良かつたから」

姉妹間でしかわからない変化なのだろう。俺にはミラがいつも通りに見えて、リサーナの言い分に首を傾げた。

「……今回の依頼報酬は魔導書だつたんだが、そういうえばミラには報酬を渡してないな」

流石に魔導書を半分にするわけにもいかず、報酬を渡していないから怒っているのかとも思つたが、リサーナは苦笑いで此方を見ていた。「確かにミラ姉怒る時、たまに怖ーい笑顔になるけどさ、今日はそういうんじやなくて」

「うう、姉ちゃんが笑顔の時つてマジで怖えんだよなあ」

何を思い出したのかエルフマンがガクブルと震え始めた。

「それに報酬なんて要らないと思うんだよね。もしそれで納得できないんだつたら、ミラ姉と今度デートでもしてあげてよ」

「……デート？」

「本当はロー兄だつて気づいてるんでしょ。ミラ姉の気持ち」

直球を偶にぶん投げてくるリサーナの言葉を無視して、俺は目の前に置かれたシチューにスプーンを突っ込み、具材を弄び出て来た芋を口に運んだ。だが、放つておいてくれるのがリサーナだ。

「ねえー、無視ー？」

「……一緒に出掛けることが報酬とは到底思えないが」

「そんなこと言つて本当はわかってるんでしょ」

「大体、依頼に付き合つて外に出ているのにそれではダメなのか？」

「……本気で言つてる？ わけないよねー」

「それに俺は恋だの愛だのを理解するつもりはない」

「ねえねえ、私、恋愛感情をミラ姉が抱いてるなんて一言も言つてないよ」

「俺もミラが恋愛感情を抱いてるとは思つてない。お前達のような歳

頃が話題にしそうなことを予想しただけだ」

「私も口一兄と出掛けることをデートつて言うよ。別に恋愛じやなく
ても、そうであつても、私は口一兄とデートするし。何よりデートつ
て言つたらミラ姉が面白い反応するし」

「…………」

リサーナ相手に口論をするのがそもそも間違いだつた。昔から誰
かと会話するのは苦手なのだ、それにリサーナはお喋り過ぎて言葉遊
びが過ぎる。

「……もう寝る」

「うん。ちゃんと考えておいてね」

言いたいことだけ言つてリサーナは話を切り上げた。俺が話を全
て聞いている前提だ。まつたくもつてその通りなので反論できもし
ないし、反論したらちゃんと話を聞いていた肯定になるが。

自室に逃げるようになり、魔導書の解析に没頭する。今、眠りにつ
けば、余計な夢を見そだつた。

「……恋愛感情か。もう二度と、関わる気もなかつたんだがな……」
いつたい何から逃げているのかも、俺はわからないままだつた。

伏兵と強敵と理解者と

やつと届いた。夢にまで見た彼と同じ舞台。S級魔道士。昇格したのは去年の秋頃。

リサーナもエルフマンも自分の事のように喜んでくれた。

相変わらず、ローゼンは「そうか」と呟くだけで多くを語ることはなかつたけど。でも、それはある意味、私がS級魔道士になることを疑つていなかつたようでそれはそれで嬉しい言葉だった。

本当は一言くらい褒めて欲しいけれど、これがローゼンと私の正しい形だと思う。

それでも悔しかつた私はローゼンにいつものように抱き着いた。

「それだけかよ！」

背後から首筋に抱き着きうりうりとほっぺを弄る。最近はリサーナとエルフマンと組むことが多くてあまり相手にしてもらつていなかつたから、少し寂しいというか……。

「……ほら」

鬱陶しいとあしらわれても仕方ないはずなのに、ローゼンは本を閉じると私の鼻先に何かを突きつけた。

花束だと気づいたのは鼻腔を花特有の匂いが満たしてから。思わずいつものローゼンの態度ではないな、と虚を突かれ驚愕したのは私が悪いわけではないと思う。

差し出された花束を受け取つて、私は少し恥ずかしげに礼を述べる。

「……ありがと」

でもまさかローゼンが花束とか。いや、そこまで驚くほどでもないな。実際、庭には花壇があり花が育てられてるし、それこそ大陸中に咲く見たことない花達が図鑑のように並べられているのだ。この花束も彩り豊かな花達の集合体で、庭で見た花がいくつも使われている。

「……漢らしくない贈り物だ」

「私はあんなことされたら嬉しいと思うけどなー」

「そ、そうか……？」

「エルフ兄はわかつてないなあ」

と、外野からなにやら話し声が聞こえてくるが私は気にする余裕さえもなかつた。

「へ、部屋に飾つてくる！」

私は逃げるようその場を後にした。

結局のところ、リサーナがお祝いのために作つてくれた夕食を食べないといけないわけで、逃げた意味などほとんどないに等しいのだが。

でも、少しだけ。

今はこんな顔見せられないなあ、と隠れたくなつてしまふのだ。



ローゼンの花壇に秋の枯葉が舞い散る季節、私はエルフマンとリサーナ……それにナツを連れてS級クエストに行くことになつた。最近は弟妹を連れて三人で組むことが多く、ローゼンとはあまり一緒に依頼を受けられなくてフラストレーシヨンが溜まつているのも事実、彼を誘つたが全然相手してくれやしない。

「いいや、姉ちゃん達を守るのは俺一人で十分だ！」

「ずりいぞエルフマン！」

それはともかく、目の前では喧騒が繰り広げられていた。

どうやらエルフマンはナツの動向が気に食わないようだ。姉ちゃん達は俺が守るの一点張り、昔からわかつていたことだがシスコン気味だから初のS級は三人で行きたいのだろう。それと、ナツに対して男としてのライバル意識つてやつだ。未だにS級じやない一人だが、経験としてはナツより先に積みたいらしい。私もエルザ相手に対抗意識を持っていたのは事実、気持ちがわからぬないのでどう止めたものかと考えているが、結局のところ私は身内に甘かつた。

「……悪いナツ。次、連れてつてやるからさ」

「……あーくそ、しようがねえか。今回は諦めてやる」

渋々と引き下がる理由は次が確約したからだろう。確かに約束してしまったわけで、反故にしたのは悪いが頼んで来た立場というのを少し弁えてはいるらしい。ナツは「次は絶対だからな！」とビシツと指を突き付けて帰つて行く。

「ナツには悪いことしたかな」

「いいんじやない。次、連れて行つてあげるんでしょ」

この中で最もナツと関わり合つているのは歳も近いだろうリサー
ナだ。フォローされているのは私なのかなツなのか、少し複雑な気持
ちながらも手荷物を担ぎ直す。

「じゃ、行くか」

「おう」

「うん」

目的地までは馬車で丸一日。ガタガタと揺れる荷台でいつものよう
に家族団欒会話、内容は拾われた頃に始まり今まで受けた依頼の内
容とかギルドでの事とか、思い返せば思い返すほど溢れ出てくる。ま
るで泉から水が溢れ出るように。その流れで唐突にリサーナがぶち
込んで来たのは核心を突く言葉。

「で、ミラ姉はいつローリー兄に告白するの？」

「な、なんだよ急に!?」

本当に突然のことだったから私の顔は真っ赤。不意打ちにもほど
があるだろ、と文句を言つても仕方ないが私としてもそんなことでき
るわけもなく……。

「……そんなこと言われても、そんな予定ねえよ」

「いいの? ロー兄つてカツコイイからそのうち誰かに盗られちゃうか
もよ」

「確かに。俺は漢として兄ちゃんのこと尊敬してるからな」

エルフマンまで……。私をからかつてゐるわけではない。エルフ

マンは本当にローゼンを尊敬しているのだ。魔道士としても、人としても、漢としても、エルフマンが目指すのはローゼンのような強い魔道士。実際、接収の使い方もローゼンに教わつていて私とリサーナとエルフマンはある意味で弟子とも取れなくもない。

そんな憧れの的のようなローゼンに思うところがあるのか、エルフマンは真剣な顔になつて言う。

「……兄ちゃんなら、姉ちゃんを嫁にしても……いいと思う」

「バツ、お前はいきなり何言つてんだよ！」

恋人すつ飛ばして結婚だなんて！

いや、そういう問題じゃないんだけど。

つーかなんでエルフマンの許可がいるのか。いつになつたら姉妹と離れてくれるのやら。

急激に上がつた体温を冷ますように手で煽りながら私は無視を決め込もうとしたが、リサーナだけは私を逃してくれなかつたようで頬に指を当てて虚空を見つめる。

「じゃあ、私がロー兄を貰つちやおうかな」

「!?」

衝撃発言をして、こちらの様子を窺うようにチラチラと見てきやがつた。思わずエルフマンと顔を見合わせる。采配は全て託すと言わんばかりに肘で弟を探りに出す。

「……その、なんだ……が、頑張れ。姉ちゃんは強敵だぞ」

そうしたらいつになくヘタレた様子でしどろもどろになるエルフマンに私とリサーナは呆れた。

「おまえ、どつちの味方なんだよ」

「そーだよエルフ兄、どつちがロー兄と結婚したらいいと思う？」

「え、えーっと、その……ど、どつちでもいいんじやないか？どつちが兄ちゃんと結婚しても、うん、俺は悪くないとと思うぞ」

でも、実際、私としては私なんかより全然女の子っぽいリサーナの方が相応しいと思うわけで、エルフマンのシンコンが姉妹両方に向いているからこうなるのもわかつていた。

「まあこんなエルフ兄は放つておいて」

蚊帳の外にエルフマンを追い出して、リサーナは言った。

「本当にミラ姉がいるなら私が貰うよ」

そう宣言する瞳を見る。マジか。マジなのか？からかっているのか、そうでないのか、私には判断がつかず、真意を知ることなんて弟妹のことを何でも知っているつもりの私でも到底不可能だった。もしも……。そんな予感がして、私は目を逸らしながらリサーナに対抗する。

「……わかつたよ。告白するよ、この仕事が終わったら」

「ミラ姉、それ何回目？」

「こ、今度こそ本当だつての！」

過去に何度も煽られては告白すると宣言しているが、自信とか何もない私はいつも肝心なところで怖気付いて未だに告白できないままでいた。ついでにこの会話も何回目か。頭ではわかつてゐるんだけど、行動できない私がいる。そして追い詰めるようにリサーナは前回の事を口にするのだ。

「前は15歳になつたら告白するんだ、つて言つてたよね」

「……まあ。そうだけど」

「でも、そうなつてやつぱりS級魔道士になつてから、つて」

「……そ、それは今考えてたとこで」

「で、S級魔道士になつたけど、計画性のないミラ姉は今更……というか昔から怖気付いちやつてるわけだ」

うう。言い返せない。

「S級魔道士になつたのも同じ場所に立ちたかつたからでしょ。言い換えればそこに行かなきや自信がないから、自分が誇れるものが欲しかつたから、つて先延ばしにして、まだ足りないの？」

今日はやけにグイグイくる。

「……だつて、私女の子らしくないし」

「ミラ姉、料理上手でしょ」

「……私は別にリサーナみたいに可愛くもないし」

「そうかなあ。ミラ姉可愛いと思うけど」

「……私はリサーナみたいにお淑やかでもない…」

「そう？・ミラ姉は優しいから私は好きだけど」

「そ、そ、うだよ姉ちゃん。他にも姉ちゃんにはいいところがいっぱいあるつて」

ようやく復帰したエルフマンが私を持て囁く。中身のない言葉に「例えば？」と聞いてみると、一瞬考え込むように黙った後、焦ったよううに大声を上げた。

「ね、姉ちゃんはかつこいいし漢前なところがいいんだよ！」

「……ぐすつ」

「わー、ミラ姉泣かないで、エルフ兄が馬鹿なだけだから！物差しがあれなんだよきつと。ちょっと残念なの、エルフ兄の基準とかアテにならないんだから！」

よりもよつてあの泣き虫だったエルフマンに泣かされるなんて。一番末の妹に抱き締められて慰められるなんて姉失格だ。

「大丈夫だよきつと。口一兄はちゃんとミラ姉のことを女の子として見てるつて。それにミラ姉が不安なのは、私もちゃんと理由はわかつてるつもりだよ。口一兄に拾われたから、でしょ」

「！」

私があいつに告白できないもう一つの理由。

自分に女としての自信がないのと、私達の関係性にある。

だから相応しくなるために、同じS級魔道士を目指した。

少しでも子供扱いされないために。果ては一人の女として見られたいがために。

拾われた私は、どうも恩というものが纏わり付いて素直な気持ちを吐き出さずにいるのだ。

まるで親子みたいな関係。それに近い、特別な絆。

私が告白できない最大の要因は、妹にはバレバレだつたみたいだ。隠し通せていくと思つたのに。

「そんなの気にしないほうがいいよ。口一兄だつてもう私達のこと、子供だなんて思つてないよ。まあ少し過保護なところもあるけどね」うん。知つてて。あいつは無愛想で無関心に見えて、意外と気を割いてくれるのだ。そういうところも好きになつた理由だけど。

「本当にミラ姉がいるんだつたら私が奪っちゃうからね」

「……わかつた。もう逃げないって。そういうの理由に逃げるのはもうやめた」

この感情が燻つたのはいつの日からか。

「じゃあ、ミラ姉指切りしよ」

「ああ……つて、何を誓えばいいんだよ」

リサーナが差し出した小指に自分の小指を絡めて、ふと疑問を持った。

「うーん。取り敢えず、逃げることかな。今のミラ姉、楽しそうなのに時折辛そうなんだよね。そういうの妹としては見過ぎでせないというか、ミラ姉には幸せになつて欲しいし」

「なんだよそれ。……でも、まあ、妹に心配されるような姉じやあダメだよな」

その日、私は夢にも思わなかつた。

これがリサーナとまともに話した最後の会話になるなんて。

雨が降っていた

天から落ちた、零。曇天よりポツポツと降り注ぐそれは静寂に包まれた部屋に反響し、大自然の旋律を奏でる。アスファルトに跳ね返り、地面に溜まつた水に波紋を描き、木の葉を跳ね、屋根を叩き、たつた一つで様々な音を鳴らした。

灯りのない部屋の窓際で魔導書の解析を続け、無意識に淹れた紅茶に手を伸ばし口につけると生温く意識が魔導書から引き戻された。随分と前に淹れたからか、冷めている。

「むつ。……淹れ直すか」

残っていたカップの中の紅茶を飲み干し、火を起こす魔法陣の上に置いたフ拉斯コで湯を沸かす。いつもならちゃんとキッチンでやるのは、ミラがいる時だけ。フ拉斯コの中の水が沸騰したら、ポツトに湯を注ぎ数分待つて、カップに出来立ての紅茶を注ぐ。一口飲んで、いい出来だと薄く笑みを浮かべた瞬間だつた。

ギイツと音がして扉が開いた。視線を向けるとミラとエルフマンが濡れ鼠になつて立つていた。幽鬼のようにゆつくりと歩き、部屋に入つてくる。「ただいま」といつもは言うのに、何処か元気がなく意気消沈とした姿に違和感を覚える。

「……湯を沸かしてやる。少し待て」

だが、その違和感が何かを考える前に、タオルを三人分取り出し、目前にいたミラへと渡し風呂場へ行こうとした時、不意に失意の声で彼女は雨音よりも小さな声で呟いた。

「……もう、 いらないんだ」

「？」

振り返り、ミラを見る。

そういえば、リサーナはどうしたのだろうか。

四人でクエストに行くと言つて、ナツは当日帰つて来ていたが。ならば、三人は一緒のはずだとナツには聞いている。

この雨の中、ギルドにでも行つたのか。或いは……。

「……タオルも、部屋も、何もかも、三人分はいらない」

「……どうのことだ？」

察しが悪い俺には分からず終い。きっと想像もしたくないのだ。想像もできないのだ。それでも、俺は痛む頭で無理やり察することにしてリサーナの帰つて来ない事實を、受け止め切れはしないが、理解することにした。

「……そうか。取り敢えず、ミラ。お前から風呂に入つて來い」

魔法で風呂を沸かせばすぐ用意はできた。しかし、戻つてみるとミラは風呂に入る用意をしていない。仕方なくミラの部屋に入り替えの服を準備する。エルフマンの服も一応、準備をしておく。

ミラの着替えを持つて脱衣所へと押し込むように送り出し、それでも動く気配がないので冗談半分にこう言つた。

「脱げないなら脱がせてやろうか」

後になつて思えば、自分が絶対に口にしない言葉。それでもミラは虚ろな瞳をこちらに向けてくるだけで、大丈夫そうじやないことがわかりきつているがどう対処しようものかわからない。ここはもう無理やり服を脱がせて風呂に突つ込むべきか。それくらいしないと動きそうにもない。体調を崩しでもしたら……。

取り敢えず、脱衣所を出て十分ほど家のなかをせわしなく歩き回つてみる。それから戻つてみるとまだミラは脱衣所で立ち尽くしたままでつた。

「……後で文句言つても聞かないからな」

がりがりと頭を搔き、ミラの肌にぴつたり張り付いた服に手を伸ばす。水を吸つていて重く、張り付くそれを優しく剥がすようにまずは上から脱がそうとしてみる。抵抗する気配がないのでそのまま脱がした。次に下。服を籠に入れて、あられもない姿になつても動く気配のないミラを押し込むように風呂場へ。

蛇口を捻り、シャワーを浴びさせる。頭頂部から浴びせた湯は滑らかにミラの体を流れていく。上から下へ。重力に流れる。そうしてあつたまつたところで浴槽に突つ込もうと近づいたところ、あちらか

らぎゅつと抱き着いてきた。まさか動くと思つてなかつたので俺はぎこちなく受け止めるしかなかつた。

「……ひつく…ぐすつ…私のせいで、リサーナが…！」

甘えるように胸元へ顔を埋めるミラが嗚咽を漏らす。シャワーの跳ねる音に重ねて、嗚咽が混じり、泣き嘆く子供のような声に俺は胸が締め付けられるようだつた。エルフマンの前では素直に泣くこともできなかつたのだろう。こんなにも弱り切つた彼女を見るのは初めてだつた。

「……そうか」

何を語るべきか、どう慰めるべきか、掛けるべき言葉を模索しても浮かばず、ただ抱きしめてやることしか出来ない俺は、今にも壊れそうなミラを抱きしめるしか出来ることなどなかつた。

泣き疲れて眠つてしまつたミラの体を拭き、服を着せ、エルフマンに風呂場を明け渡す。どうやらエルフマンの方はミラほど重症ではないようで、俺の腕の中で眠るミラを……というより、俺を見るなり俯いたまま懺悔の言葉を口にする。

「……兄ちゃん。今更、兄ちゃんの毎日のように言つていた言葉の意味がわかつたよ。『己の力に溺れるな、過信するな、慢心するな、魔法は誰かを傷つけるために存在するものじゃない』って。俺は未熟だつた。それはわかつてた。なのに、俺が二人を守るつて……無理な話だつたんだ。姉ちゃんより弱いのに、何言つてんだつて自分でもわかつてたつもりなんだけどな」

「……そうか」

「兄ちゃん、姉ちゃんのそばにいてやつてくれねえか。俺は大丈夫だからさ」

「……わかつた」

「何も聞かないのか、兄ちゃんは」

実際、どうしたものかと悩んでいたのだが本人達が話さないものを無理やり聞くというのは憚られ、時が来るに任せようとしたのだがミ

ラの塞ぎ込みようが気になる。が、話していないことがあるといえば、俺も同じだ。

「……人には話せないことの一つや二つある。だから、無理には聞かない」

「そつか。……俺が失敗したんだ。姉ちゃんのせいじゃない。俺が全部悪いんだ」

まるで譴言のように呟くエルフマンは後悔の色を瞳に宿していた。そして、語るのは魔法に失敗して暴走してしまったということ、自らの手でリサーナを殺してしまったこと、それだけ告げると風呂場へとゆらゆら歩いていく。

掛けるべき言葉はやはり持ち合わせておらず、ミラを部屋に運びベッドへ寝かせる。布団を掛けて退散しようとしたところで、袖口が不意に引っ張られ振り向いた。

重い瞼を開けて腕を布団の中から伸ばし、ミラは俺を引き止めようとしていた。

「……もう少しだけ、隣に…」

夢現の中、必死に伸ばした手は誰を思つてのものなのか。非常に弱々しい姿を見ていため、だが逸らすことなかれ、傍にあつた椅子を引き寄せ座り頭を撫でた。

「いつまでもいてやる。だから、今は眠れ」

そう約束をするとミラは「ごめん」と謝罪の言葉を口にした。それは彼女が眠りに着くまで延々と続き、その言葉が聞こえなくなつたのは夜も深くなつてきた頃だつた。



「……ゼン」

声が聴こえた。優しく誰かを呼ぶ声が。意識も覚醒しきらない頭で誰の声か、誰を呼ぶ声か、深い海の中で揺蕩う意識を引き戻し俺はその声の主を見上げた。

「ローゼ…」

誰かが俺を見下ろしていた。

「ローゼン」

再度呼ばれて、視界がクリアになる。

「……すまない。いつのまにか眠つていたようだ」

ベッドの毛布に半分身を入れたままのミラが俺を呼んでいた。酷く懐かしい声に呼ばれた気がしたが、どうやら半分眠つていたせいでそう感じてしまつていたらしい。ここがミラの部屋だと気づくのも遅れて、何故ここで眠つてしまつたのかを思い出し、ようやく現状が理解できたところだ。

「……なあ、ローゼン」

「なんだ？」

「ど、どうして私の部屋で寝てんのか…気になつて…」

……まさか昨日のことを忘れたのだろうか。ミラはいろんな感情が飽和したような顔で問いかけてくる。戸惑い、迷い、悲しみ、痛み、それはもう本当に色々なものを混ぜたような顔で、俺はベッドに俯せにしていた上半身を起こして答えた。

「どうしてつてミラが言つたんだろ。傍にいてほしいって」「た、確かに言つたけど……」

「いつまでいればいいのかわからないから、起きるまではいようと思つたんだが」

「べ、別に眠かつたなら部屋に戻つてくれても良かつたのに……」

「それは先に言え」

「いや、その…わかるだろ…そりや、ずっといてくれたのは嬉しいけど…」

欠伸を噛み殺し、少しだけ元気を取り戻したらしいミラを薄目で見つめる。彼女は氣の抜けた表情で、思い出したようにがばっと顔を上げた。

「そ、それと、昨日のことは忘れてほしい」

「昨日?」

「引き止めたことか?」

「引き止めたことか?」

「そ、それもだけど……私の、裸、とか……」

顔を赤くして毛布で必死に隠しながら詳細を語る。確かに見たが……下心とかそういうものをあそこで起こす余裕などなく、実際殆どこちらも覚えていない。思い出そうとしても湯煙に細部が隠れてしまった記憶。その代わりに心ボロボロで悲痛に顔を歪ませる彼女の顔が浮かび上がった。

「安心しろ、殆ど見てない」

「私が泣いたのも、忘れてほしいんだけど……」

「それは無理だ」

ミラの要求を突っぱねる。対してミラは困ったような顔をした。
「……大切な誰かを喪つて泣くのは当然のことだ。その涙を忘れるな。たとえどんな事情があろうと、その涙を消してはならない。自分の気持ちに嘘をつくことになつてまで、それは誰の記憶から消していくものでもない」

「ローゼン……」

「いくら悔やんでもいい。泣いてもいい。停滞したつていい。最後に歩き出せたのなら、それでいいんだよ」

「…………」

それがたとえミラの心に届かなくても、俺は何度だつて口にしたろう。慰めるためでもなく、叱るわけでもなく、偉そうに助言するわけでもなく、願うような言葉を贈る。きっと君には前を向いて生きてほしいから、押し付けるわけでもなく、ただ願う。長居時間を賭けてでも歩き出すことを。俺は少し道を違えてしまつたから。だから、ミラには光溢れる道を歩いて欲しいと。

「そろそろ食事にしようか」

黙り込んでしまつたミラを連れて、階下へと降りて行つた。

食卓の用意はいつも通りだつた。いつも通りに四人分作り、四人分の食器を並べ、そこでようやく気づく。一人分多いことに。二人が何かを言う前に俺は慌てて片付けようとした。その手を横から掴まる。

「姉ちゃん……」

俯きながら懇願してくるミラの意思を汲み取り、そのままにしておくことにした。三人がいつも通りの席に座る。ミラが俺の隣で、その対面にエルフマン。俺の前は空席の状態。いつもリサーナが座る席が空いている。

合掌し各自の食事に手をつけ始める。ミラもエルフマンもいつもは口を開くが今回ばかりは無言で黙々と食事を続けた。俺は当然のことながら、普段から寡黙を貫いているので普段とは違う行動を取ることもできない。こういう時、慰めの言葉はあまり意味をなさないからだが、何か言葉を掛けるべきかと頭の中はいっぱいになつた。

静寂の中でカチヤカチヤと銀製の食器の音が鳴る中、静寂を破ったのは意外にもエルフマンだつた。

「兄ちゃん、姉ちゃん」

「……」

「なんだ、エルフマン」

ミラがエルフマンの言葉に口を開かず、視線を向けるだけなので俺が代わりに聞いてみた。普段はミラとは逆の立場であるが、今この場でそれを指摘するものはいなかつた。

エルフマンは持っていたスプーンを置き、真面目さと何処とない暗さ、そして迷いの果てに辿り着いたであろう男の顔をした。

「俺、ギルドの寮に入つて一人暮らしを始めてみようと思う」

それは、今までのエルフマンからは考えられない発言だつた。

「……ど、どうしたんだよ急に？」

ミラが此處で初めて口を開いた。少し俯き加減だつた顔を上げて、

エルフマンの顔を見据える。

「色々考えたんだ。俺はこれからどうしたらいいんだろうって」「どうしたらつて……」

まだ、ミラでさえ迷宮の中で迷子の最中で、突然の弟の言葉に返す言葉を失う。消え入るように言葉が続かなかつたミラはそのまま黙り込んでしまつた。

そこでエルフマンはキッと顔を上げる。

「どうしたらいいんだって考えて、答えなんて出なかつた。兄ちゃんが昔言つてくれた言葉がなけりや、俺一人でなんて答えの一つも出せなかつたと思う。そんで思つたんだ。今度はもう後悔しないように、強くなりたいって。誰かを本当に守れるように強くなりたいって。だけど強くなるためにはどうしたらいいかわからぬから、取り敢えず、一人で生きられるように一人暮らしを始めてみようつて思つたんだ。そこからスタートにしようつて思つたんだ」

そこにあるのはミラの弟という存在の顔ではなく、少し不安や後悔に苦笑混じりなもの、瞳は小さくも強い決意を表していた。

「そ、そんな、別に一人暮らし始めることなんて……」

「姉ちゃんを一人にするのが不安だ、なんて言い訳でしかないんだよな。俺自身が姉ちゃんから離れられない言い訳にしてんだ。だつて兄ちゃんがいれば、姉ちゃんのことは安心だから。姉ちゃんの傍に兄ちゃんはいてくれるだろ」

きっとそれは心の何処かでいつも燻つていた思いなのだろう。エルフマンなりに、そろそろ姉から離れることを考えていたのかもしれない。

「兄ちゃんにはまだ魔法で頼る事もあるだろうけどさ。俺は俺なりに強くなりたいんだ。だから、兄ちゃんには強くなる方法を教えて欲しい。これは俺のわがままなんだけどさ」

「……そうか。教えはするが、強くなれるかはお前次第だぞ」

「わかつてる。ありがとう、兄ちゃん」

そもそも、力というのは一朝一夕で手に入るものではない。それはエルフマンとて今回のことでのわかつているのだろう。そして、この日エルフマンはこの家を去つて行つた。

失踪

それはいつしか当たり前の光景になっていた。仕事から帰れば家に明かりが点いている。外からでもわかるくらい賑やかな声。家が見える位置に来ると、それだけで少し暖かい気持ちになつた。しかしそもそも随分と前の話、今では夜暗くなつても部屋に明かりをつけず、ベッドの上に座つてミラは独り何処かを見ている。そんな日が続いた。

だから、今日も家に明かりが点いていないのはいつも通りのことなのだ。

最近は依頼どころかギルドに顔も出していない。ミラに合わせて俺の生活習慣も少しだけ違つてたりする。だが、いつまでも付き添つていては逆に思われるだろうと日帰りの依頼を受けた。それを終えて、帰つて来た時だ。

家に入ると人の気配がない。あれから今までミラは外を出たことはなかつた。だから、家にいないうはずはないのだが……自分が思つた以上に疲れているのかと自分の感覚を疑つた。

「ミラ」

特に意味や用などはないのだが、部屋を訪ねてみる。ノックに返事がないのはいつものこと。部屋の扉を開くとそこは月明かりで照らされた幻想的な空間で、ミラの姿はなかつた。

「……いない、のか？」

元エルフマンの部屋、自分の部屋、風呂、トイレ、あの日からずつとそのままにしてあるリサーナの部屋、家中を探したが何処にも姿は見当たらなかつた。色々と探し終えてから、思案する。エルフマンのところに行つたか、ギルドか、それとも……大聖堂隣の墓地か。こんな時にこそ役立つ魔法、いや役立てなければもはや無意味とさえ言っていいだろう、遠く離れた地を俯瞰することができる魔法を使用し、墓地とギルド、ギルドの寮を見てみた。が、姿は見当たらない。

魔法では情報を取りづらいので足を運んでみることにした。ギルドの方にも顔を出してみた。

「誰かミラを見ていないか！」

一人一人聞くなんて面倒だ。と、声を出してみたがギルド内は酷い喧騒に満ちていて耳を傾けるものなどいない。急用だつたので冷静に頭を働かせて注意を引いてみると、魔力でドパンと破裂音を響かせる。それも鼓膜が破れるレベルの荒技、これくらいしないところからは人の話を聞きやしない、と経験則が雄弁に語っている。「むおー。ローゼン、おぬしまで非常識極まりない行動を……いつたいどうしたというのじゃ」

入り口付近にいる俺に気づいたマスターが耳を抑えながら床や机とキスを交わしている喧騒の原因達を見て、場合によつては叱責すべきかと視線が語つていた。蹲つている奴の中にはエルフマンもいる。

「姉ちゃんの姿は最近見てないよ。そ、それで、兄ちゃん、急にどうしたんだよ？」

「ふむ。見ていないといえば見ていないな」

それぞれが同じように口を開けばそんなことを口にする。実際、ミラはギルドに一度も顔を出していないし、それよりと興味深そうにマスターやギルドの者達が口にする。

「珍しいね、ローゼンが声を荒げるなんて」

「つーか、珍しいんじやなくて初めて聞いたわ。ローゼンが声を荒げるの」

他の者達の反応に僅かながらも親しきエルザとエルフマンが痛む頭を抑えながら、

「そこのところどうなのだ、エルフマン？」

「いや、怒つても兄ちゃんって声を荒げないから。つーか、怒つたところ

もみたことねえ」

と、顔を見合わせる。

「エルフマン、何か知らないか？」

「……え、姉ちゃんがいなくなつたのか？」

肯定すると、エルフマンの顔がみるみるうちに青褪めていく。
「ど、どうしよ！」

「いやしかし、それほど焦る必要もないだろう？」

焦るエルフマンに対して、落ち着いたエルザの声が響いた。皆一様に「あのミラだぜ？」と言つてのける。

「そう簡単な話でもないんだ。今のミラは何をするかわからない。……本当は目を離したくなかったのだが、いつまでも傍にいるのもどうかと思つて離れたんだが……すまない、エルフマン。ここに来る前に行きそうな場所は探したのだがな」

「いや、でも、兄ちゃんはこの一ヶ月ずっと姉ちゃんについててくれたろ。姉ちゃんがいなくなつたのは仕方ねえよ。誰のせいでもねえ」

謝れば謝り返され、もう心当たりを聞こうにも頼みの綱はエルフマンしかいない。その彼も心当たりはないと言う。二人でああでもないこでもないと議論を交わしていると、マスターがカウンターの方から歩いて来た。

「落ち着け。ローゼン、エルフマン」

「俺は落ち着いている」

「どこがじやバカタレ。魔法を爆発させた拳句、ワシもあんな大声は初めて聞いたわ」

「……」

「おまえさんがそんなんでミラを探し出せるとと思うところのか？」

「俺は……いつも通りだ…」

「そこまで心配せんでもよいじゃろう？」

「心配などしていいない。ただ、放つておくのも気が引ける……」

「動搖しとるのう。何故、ミラを探す必要がある？自分から出て行つたと考えるのが妥当とは思わんか？いつものおまえさんなら去る者追わずじやううて」

ギルド内の者達が揃つて頭を縦に振った。その時、俺の心はまるで一人きりで何処かにポツリと立たされたようだつた。そんな俺の心にマスターの声が響く。

「ローゼン、おぬしにとつてミラがそれほど大切になつておつたんじゃの」

「それは、違つ…」

「違う」と否定しようとして、最後まで言い切ることはできなかつた。いつもの無関心はどこ行つた。放つておけばいいじゃないか。今まで通り普通にしていればいい。結局は赤の他人だ。関わること自体無意味だ。切り捨てる。今まで通りをもう一度やり直せ。もう一度、もう一度……。

——自分を再定義する。

もうこの世界に期待など抱いてはいないはずだつた。自分の生を無作為に棄てた。生きる屍であれど、自分は自分を呪い誰とも関わらないつもりだつた。ミラを拾つたのだつて気紛れだ。哀れだなんて思つてない。何とも思つていなかつた。慈悲でもなければ正義感でもない。だから大切になんてなりはしないのだ。

リサーナが死んだのだつて俺は……。そこに悲しみを抱いてはないはず。誰かを失うのは当然のこと。だというのに、この心臓を刺すような痛みと彼女に對して浮かんだ、この感情は……。

「……なあ、マスター」

「落ち着いたようじゃな」

「……俺にとつてミラは、リサーナは、何だつたんだ？」

「それを知るのはおぬしだけじや」

「……俺は自分がわからない。だが、やることはわかつてゐんだ。探

さなきや。俺は絶対に後悔すると何故か思うんだ」

「ローゼン、運がいいことに此処には数だけはある。探すのに手を貸さない者は一人とて居らんじやろう。だから、お前さんはもう少し冷静になつて手掛けりの一つくらい探してみればよいじゃろう。案外、見落としているかもしけんからのう。流石にエルフマンやローゼンに言伝もなしに居なくなるなど、考えはせん」

「……」

諭され、俺はまた無言になつた。そこに思い出したようにエルフマンが声を上げる。

「そういうえば、姉ちゃんもリサーナも日記書いてたから、もしかしたら手掛かりになるかも……」

「そうか。探してみよう」

踵を返し、ギルドを足早に出る。

モヤモヤと燻る感情に不思議と不快感はなかつた。

それは俺の部屋で見つかつた。見慣れない便箋が机の上にあつた。その中身はやはり手紙で、筆跡も何もかもがミラのものだとわかる。慎重に開けると中身に目を通した。宛先は俺とエルフマン、たつた一言『探さないでください』と簡潔に書かれた手紙を見て何とも拍子抜けした気持ちになつてしまふ。

「……これで別れのつもりか。まつたく、適当にも程があるだろう」
探さないでと言われば探すわけにもいかない。俺は探さないことに理由を付けた。何故か納得いかないが、この時は少し様子を見てみることにした。

——それも、一週間が過ぎて。

「ミラを探しに行こうと思う」

「……兄ちゃん、探す必要はないとかなんとか言つてなかつたか？」

ついに、ミラの置き手紙も無視して俺はこんなことを言い出した。マグノリア近辺を捜索したが手掛かりの一つすら見つからず、ギルドメンバー達は仕事の合間に探してくれことになつてゐる。

「それに兄ちゃん、働き過ぎだよ。こんなじや姉ちゃん見つける前に兄ちゃんが倒れる。無理し過ぎだ」

「俺はいつも通りだ」

「……いや、いつも通りつて毎日依頼を何個も受けて碌に家に帰つて

ないだろ」

「ミラを探してゐるのもついでだ」

俺も依頼の合間にミラの姿を探してゐた。なんというかあいつには一言何か言わないと気が済まないのだ。だから、必死になんてなつてないし、見つかればいいな、くらいにしか考えてない。

「それにしてもギルドの皆が方々に散つて、兄ちゃんでも見つけられないなんて……」

「ついでだからな、簡単に見つかるなら苦労はしない」

遠方を俯瞰する魔法はあるど、人を探す魔法は持つていない。故に探そうと言つて簡単に見つけ出せるわけもない。しかし、あまりこの手は使いたくなかったのだが……。懐から一冊の本を取り出す。鍵付きの本。ピンク色の冊子のかなり可愛らしい品だ。

「それは……姉ちゃんの」

「他人の手記を読むのは気が進まないんだが……」

そもそも言つてられない上に置いて行つたのはあいつだ。もうこの際どう思われようが構わない、優先順位はミラを見つけ出すことなのだ。鍵がないので鍵は氷の造形魔法で代用する。冷気を放つ透き通つた氷の鍵が手に現れたのをエルフマンは瞠目した。

「グレイの氷の造形魔法！」

「……言つておくが、俺をあの裸族と一緒にするなよ。脱がないからな」

氷の鍵を鍵穴に差し込み解錠する。そうすれば意外にもあつさりミラの秘密の日記が開いた。

「さて、と……」

パラパラと捲つてみる。最初の記録はミラが魔導士になつた日、そこからこの手記は始まつてゐる。

『私は魔導士になつた。初めての依頼はローゼンと一緒に魔物退治だ。初めて魔導士としての報酬を貰つて、何を買うか迷つたけど私はこの日を書き記す為に、これからのこと書き記したいから、日記にしてみようと思つた。これから何かあつた日には、日記をつけていこうと思う』

最初の日付はミラと出会つてそう経っていない。そこから頁を捲り、読み進める。意外にもミラはほぼ毎日日記を書いているようだつた。それも他愛のない話。誰かと喧嘩したこと、誰かと何かをしたこと、気に入らなかつたこと、楽しかつたこと、嬉しかつたこと、感情を書き殴るようなもの、それはまるでミラの感情を秘密裏に解き放つた玩具箱のようだつた。どんなことだつて感情が左右されれば書き記している。喜怒哀楽余すことなく触れていた。

しかし、なんだ……俺に関することが多いように思う。八割程日記の内容には俺が絡んでいるのだ。

次々と読み進めていくうちにあの日の頁へ。しかし、白紙になつていて記録はつけられていない。前の頁へと戻れば、それはリサーナを失う前日。そこから先は何度捲つても書かれてはいなかつた。

「……なんというか、客観的に俺を見ているようだな」

「で、兄ちゃん、何か手掛かりはあつたのか？」

「いや、まつたくだ。俺の事以外に書くことはなかつたのか？」

「……あとで怒られねえかなあ。姉ちゃん、ごめん」

急に顔を伏せて謝罪を述べるエルフマン。認めたくはないが、俺はエルフマン以上に必死になつてミラを探している。それもこれもあんな状態で去つて行つたあいつが悪いのだ。心配するなという方が無理だ。

「……まつたく世話の焼けるやつだ」

ミラの日記帳を閉じ、誰にも聞こえない声で呟いた。

旅人

幾度の夜を越えたのだろう。太陽が沈み、月が昇つて、また太陽が昇る。繰り返す月日、時間の流れは私を待ってくれない。マグノリアの街を出て何度、月が欠け、満ちたのか。

——私はこんなところで何をしてるんだろう?

自問自答は答えが生まれず、水泡のように消えてゆく。考えたくないから、私は浮かび上がった疑問に見て見ぬ振りを続ける。

此処はマグノリアから遠く離れた湖畔の街。

片田舎のこの街で私は酒場に住み込みで働いていた。

理由は特にない。

逃げた先がこの街で、私のことを気に掛けた老夫婦が拾ってくれて、酒場のマスターだつたというだけだ。

行く宛もなく、彷徨つていた私は此処で立ち止まつた。停滞し、次はどうしようか、なんて考えることもできなかつた。

ただ住ませてもらうのも気が引けるので、酒場で働いていたら看板娘になつた。老夫婦の家族には気に入られていて、娘夫婦のそのまた息子に至るまで私は良くしてもらつていた。

家族つて、親つて、きつとこんなものなのだろう。

あたたかい夢に私は浸つていたかつたのかもしれない。

素性の知れない私を受け入れてくれた、この場所は居心地が良かつた。

だからなのかも。私はここに来て、とても長い夢を見ていたような気もする。

「ミラちゃんが此処に来てもう一年くらいか……」

老夫婦のその孫、ロナルドさんが唐突に呟いた。開店準備にテープル拭いたり、椅子を並べたり、朝の忙しい時間、老夫婦やそのまた娘夫婦が買い付けに行つてゐる時間だ。残された私とロナルドさん

は残された業務に身を投じていた。感慨深げに浸りながら、下拵えされた食材の準備を進めていた彼がこう話し始めると大抵は決まっている。

「もう、そんなに経つたんですね」

私も気のない返事をして自分の仕事に精を出していた。スープを煮込んだり、野菜を切ったり、肉に下味をつけたり、元々得意だった料理を任されるほどには信頼されているのだ。

だけど、この人の信頼はちょっと違うというか……。

「ミラちゃん綺麗になつたよね」

「いえ、そんなことないですよ」

気に入られている、というのも少し違う。時々こうして口説いてくるし、私も意図には気づいているのだけど、あまりそういう気にならないのも事実。「綺麗」だと口説かれる度に私の脳裏には大切な人の姿が浮かんだ。

老夫婦や娘夫婦も私に浮いた話がなかつたり、それなら彼ならどうだろうかと勧めたりするけど、私は愛想笑いでどうにか切り抜けることを繰り返した。あの人は、孫の、息子の、幸せを願っているだけだというのはわかってる。私が色好い返事をしないのが分かると仕方ないと諦めるあたり、押し付けないいい人達なのだ。

けどまあ、ロナルドさんはこうして何度も忘れた頃に口説いてくる。

「……ねえ、今度、街に遊びに行かない？」

「すみません。今度の休日はやることがあるので」

特に酒場で口説かることの多い私はもうひらりひらりと躱す術を身につけていた。この人が口説きに来るのも、大体私目当てのお客さんが私に声をかけた次の日あたり。お陰で私は前日にどう躱すかを考えながら眠る毎日だ。彼の老夫婦からは恩もあつてあまり無碍にしづらいから余計に困っているのだけど、その度に私の中で、失くしてしまつたあの子が引き止めてくれていた。

——ミラ姉、本当にいいの？

後悔はないのか。この今までいいのか。頭の中で何度も問い合わせ掛け

た。まるで自問自答するようなそれに、私の心は確かに激しく動搖していたのだ。

「……僕は本気だよ、ミラちゃん」

いつになく真剣な表情のロナルドさんに私は笑みを返す。愛想笑いか、苦笑いか、取り敢えず上手くは笑えていないんだろうと自分でもわかつていた。

なら、もういつそ話してしまおうか。この人も私に好きな人がいれば諦めるかもしれないと思い、脳裏に思い描くあの人の背中、今でも鮮明に思い出せる彼の顔を浮かべ、そして同時に愛しさが浮かぶ。

「……私、好きな人がいるの」

「えっ!?

「だから、ごめんなさい」

「えっ、嘘だろ!?」

今までそんな素振り見せなかつたから仕方ないのかもしれない。私自身前いたところに好きな人がいたとかそんな話はしていない。彼らもまた私から詳しい話を聞こうとはしなかつたから。ロナルドさんは取り乱したように問い合わせてくる。

「酒屋のニック? 肉屋のジャック? いやそれとも魚屋のアバン? いや大本命は最近出来た高級レストランのジエフか?」

「……いいえ、この街の人じゃないわ」

全てをNOで否定する。すると、ロナルドさんは何かを察したよう

にハツとした表情。

「……もしかして、前住んでいた街に?」

コクリと頷くと、ロナルドさんは何を思つたのか頭をぐしゃぐしゃと搔き乱した。

「……いや、でも、随分と前の話だろう。それでも、まだ……」

「ええ。あの人は、私の初恋の人だから……」

「だけど、でも……こんなに時が経つのに探しにも来ない人のことがなんで今更!」

「……そうね。あの人はきっと私のことなんて探さないわ。優しいけど、昔から無関心で、無愛想で、切り株のような人なんだもの」

「だつたら尚更！」

「それでも私、夢を見てるのかしら。それとも私自身、約束を果たすのも、踏み込むのもきっと怖いんでしょうね」

私の表情はどうなつていてるだろうか。

ただ、目の前のこの人が口籠るくらいには酷い顔をしていたのだろう。



開店。営業。閉店。翌日の準備。毎日がその繰り返し、夕刻を過ぎた頃だった。此処には柄の悪いお客様も来店する。闇ギルドの魔道士、盗賊のような風貌の者、客は迷惑でなければ相手を選ばないのが酒場だけど、もつとも選べないというのもあるのだろう。見るからに柄の悪い席には近寄り難く、私が代わりに対処していることもある。その私も今や魔法は使えないのだけど。

「ミラちゃん凄いわね」

「いえ、慣れますから」

荒くれ問題児だらけのギルドで活躍していた私は、もつとも昔はやんちやしていたのもあって柄の悪い客と意気投合するのも簡単だった。それを素直に褒めた老夫婦の娘メリーサンにそう笑顔を返す。

そんな時、フラフラと新規のお客様が来店するのを目端で確認した。此処では珍しい旅装束のマントを着た、フードを深く被った男の人。顔が見えないが私にはその人がかなりの手練れに見えた。

珍しいので私は注文を取りに行くついでにその人に近寄つてみる。何かマグノリアの情報を持つていなかと少し期待していたのかもしれない。此処では「またフェアリー・テイルが問題を起こした」くらいの情報しか入つてこないので。勿論、ローゼンは問題を起こさないから話題に上るのは恐怖を込めた噂のみなれど、私の弟が問題を起こした噂を聞くと姉として恥ずかしくもなつてくる。

此処はある意味で私にとつて都合のいい場所だつた。
酒場はそういつた情報が手に入りやすいから。

「御注文はお決まりですか?」

その旅人に私はいつもの仕事通り接した。水の入ったコップを置き、空になつた木の盆を胸に抱く。それから数秒して遅れて聞こえた声に私は全身が震えるのを感じた。

「……ああ、何かオススメはあるか?」

何気ない一言。だけど、その声を私は知っている。

思わず、私の中の細胞という細胞が反応してしまってほどに、待ち焦がれていた声だつた。

最初の第一声がそれというのがとても残念だけど。

そんなことを気にする余裕もないほど、私は歓喜していた。

盆を落とした。木製の盆らしい鈍くて優しい音が鳴る。しかしそれに動じず、硬直してしまつた私の方を見ると、旅人は私の代わりに盆を拾い上げた。

「大丈夫か?」

「あ、ええ、はい。大丈夫です」

今度は目が合つた。間違なく彼——ローゼンだつた。

しかし、彼は気づいていないのか憂鬱そうに視線を水の入つたグラスに戻す。

「……そ、そうですね。今はミードとジエノサイドキングサーモンの塩焼き、それと……シチューがオススメですよ」

「なら、それを頼もう」

「お酒は大丈夫ですか?」

「問題ない」

つい、ローゼンが飲酒をしたことがほとんどない事に気付いて聞いてしまう。飲酒をしたのだつて、潜入した船上パーティー以来ではないだろうか。しかしながら気づかれていないことが悔しくなつて意地になつてシチューだなんて言つてしまつた。昔、彼のためによく作つただけのその料理を。でも、作り置きもあるのは確かなのだ。前に作つたシチューがお客様に好評で常時メニューとして取り置かれているのだから。

厨房に戻つてメニューを伝え、ミードだけを準備して席に戻る。彼

は何故か水の入ったグラスの縁を指でなぞっていた。そこからリーンと音が響き渡る。とても綺麗な音色だつた。

「何処から来たんですか？」

「……さあな。前の街の名前など覚えていない」

てっきりマグノリアが答えかと思ったが、どうやら違うようだ。ローゼンはグラスの縁をなぞるのも飽きたようでミードを口に運ぶと一口飲む。

「この街には何が目的で？」

「少し、探し物をな……」

また、一口飲む。「探し物」という言葉に少しだけ、私は期待を抱いた。

「探し物ですか。それつていつたい……？」

「……だが、中々見つかなくてな。もう一年近く探しているんだが

……探し物は得意じゃないんだ。大事なものを……よく失くす」

何か言い濶み答えづらそうにしていたが、お酒も入っているせいから素直に答えてくれた。しかしそれ以上を聞いても答えてくれない。また一口飲むとグラスの中は空になつている。割と強めなお酒を入れたがあまり効果がなく、おかわりはいるかと聞いたところ頼まれたので悪戯心で私はもつと高い度数のミードを用意した。彼はまた一口飲んだ。

「……それつて大事な人だつたりするんですか？」

あまりに口を割らないのでこちらから質問してみると、すると、彼は何処か遠くを見る眼差しでこう答えたのだ。

「……あくまで客観的に見ればだが。俺はどうやらそいつのことが大切だつたらしい。こうして探すくらいにはな

まるで他人事のように言う彼にちょっとムツとする。普段は絶対にローゼンは認めたりしないだろうが、意地でも私は彼に色々と話させてみたいことがあつた。彼が本心を吐露することなんて滅多にないのだ。

「そんな曖昧じや、見つけられても相手は困っちゃいますよ。世の中そんなに甘くないですから」

「…………」

思わず説教地味た事を言つてしまい、ローゼンは視線を私の方へと向けてきた。ああちよつと言い過ぎたかな、なんて思つていると彼は再度グラスに手を伸ばす。

「……」んな事を話すのはなんだが。自分でもわかっているんだ。大切なものだと認めたくないから、こうしてくだらない戯言を口にしているだけだと

「他の人の意見とかじやなくて、あなたにとつてその人はどういう人だつたんですか？」

「……」

「ほ、ほら、私に喋つても本人が聞いてないならいいじゃないですか。酒場つてそういう愚痴漏らしたりするところですよ」

「……まあ、それなら話してもいいか……」

酒が入つてるせいだろうか。やけに素直だ。しかも、どさくさに紛れて確認したところ私のこと本気で気付いてない様子だつた。それはそれでなんだか心に来るものがあるというか、ほつとしたのと少し残念な気持ちになる。

「言葉というのは曖昧なものだが……大切だつたのは確かだ」

「……そう、なんですね」

「大切」だと言われて、嬉しくないはずがない。今、私の頬は赤く染まり、表情は可笑しくなつてゐることだろう。料理を取つてくると言つてどうにか誤魔化して一時撤退したものの、新鮮なローゼンと話したい私がいる。料理を揃えて戻ると相変わらずの無表情でお酒を口に運んでいた。そういうえばローゼンが完全に酔つたのを見たことがない。それもあまり酒を口にしないからだけど。

しかし、同じ席に長いするわけにもいかず、私は酒場の中を馳け廻る。注文を取つたり、酒が足りないだの対応したり、そんな中で柄も悪く酒癖も悪いお客様がいるわけで。

「姉ちゃん、ちょっと此処に座つて話そうや」

「すみません。業務中ですので」

「そんなのいいだろ？ それとも嫌なのか？ おお？」

「は、離してください」

その席から離れようとすれば腕を掴まれる。その席は運の悪いことにとつても柄の悪いお客様達。本来の私ならこんな人達相手にすらならないのに、今の私は魔法を使うことはできない。それに彼の前で魔法を使うのも、何故か躊躇われた。

「すみませんがお客様。此処は酒場ですのでそういった行動はお控え願えますかな」

そこに酒場のマスターであるお爺さんが割って入った。

「ああ？なんだジジイ」

「私の身内も困っています。ですので、そういうた行為はお控えいただけないでしようか」

「テメエにや関係ないだろうがよお！」

「どう！」

荒くれた男性客の鉄拳がお爺さんに突き刺さる。お爺さんは他のお客様が着いていたテーブルに突っ込み、テーブルが破壊され、床へと呻きながら

倒れ伏した。

「ゲイツさん！」

「じいちゃん！」

私を拾つてくれたお爺さんの名前を叫ぶ。駆け寄り身体を起こすと、ゲイツさんの意識は辛うじて残っている程度でかなりのダメージが窺えた。

「お、お前らこんなことしていいと思つてるのか！」

「なんだやるのか？いいぜ、相手になつてやるよ」

今私の私でもわかるくらい熾る魔力の波動。男から吹き上がる魔力は完全に攻撃の意思を示していた。そして、その肩にはギルドの紋章。確かにあれは正規ギルドではない。闇ギルドのものだ。同じテーブルを囲う三人の男。おそらく彼ら全てが魔法に通ずる者なのだろう。口ナルドさんは立ち向かおうとしたものの萎縮してしまつている。

「……っ」

静寂が酒場を包んだ。他の客達も事の成り行きを見守るように傍観に徹している。そんな中で銀製のスプーンが音を鳴らし、ガタリと私の背後で席を立つ音が聞こえた。ゆっくりと歩いてくるその足音、私はそれがとても聞き慣れたもので、店内にいた彼の事を久しく思い出した。

「やれやれ。煩くてまともに食事もできやしない」

「テメエ、俺達が誰だかわかつてんのか？」

「さあ、見たことも聞いたこともないな。そんなギルドの紋章にも覚えはない」

「俺たちは六魔将軍傘下の闇ギルドだ。手を出したらどうなるかわかつてんだろうな！」

「……生憎知らん」

ローゼンは何処からともなく杖を取り出しゲイツさんに翳す。淡く漏れた光がその身体を包み、癒していくのを見て私は驚愕してしまう。まさか、回復系統の魔法まで持っているとは知らなかつたからだ。

「テメエ、舐めやがつて！」

「俺の炎で消し炭にしてやる！」

「よし、三属性合体魔法で……！」

男達の魔力が高まつたその瞬間、それを搔き消すように膨大な魔力の波紋が波打つた。ローゼンは涼しげな顔で杖をドンと突き、それと同時にさつきまで攻撃の意思を見せていた三人が床へと突つ伏した。テーブルに額を突き刺し、床に穴を開け、椅子に座り直しその上で椅子を破壊して床に突き刺さる。それぞれ苦悶の声を上げて、床へと伏した。

「コイツらはこのまま評議員に送りつけてやろう」

「あ、はい」

そしてそのまま、ローゼンが杖を一振りするだけで三人組の姿が消える。忽然と姿を消したのに同じくゲイツさんに駆け寄っていた口ナルドさんは目を白黒させていた。ついでとばかりにもう一振りし、壊れた机や椅子、店内は元通りになつた。

「邪魔したな」

それだけ言つて一袋の金貨を落として去つて行く。当然のように酒場を去ろうとしたあの人へ、私は手を伸ばしかけ引つ込むところを口にしていた。

「……あの、また来てくれますか？」

ローゼンは一度立ち止まると振り返る事なく、返事もなしにまた歩き出し去つて行つた。

停滞しない時間

ローゼンが店に来るのは毎週一回、週の始まりだ。

その日の前日になると私は決まって買い出しに行く。彼が来るといつも頼むシチューの材料を買うためだ。店が閉店してから仕込みを始め朝までゆっくり煮込み、味付けを整えると完成したシチューをローゼンが来る時間帯——夜まで寝かせておく。その間に少し仮眠を取つて、昼からの営業に合わせて起きてと繰り返す毎日だ。

そんな朝、シチューを煮込んでいた私に起きて来たゲイツさんは言つた。

「ミラちゃん。最近、料理上手くなつたねえ」

「そうですか？」

この酒場のマスターであるゲイツさんは味見に一口シチューを貰うと、目を細めて何かを思い出すかのように虚空を見つめる。
「それも全部、彼のためかい？」

「え……？」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。ゲイツさんが言う彼とは誰なのか。私の脳裏に浮かんだのはただ一人、ローゼンだ。

「最近、此処に来るようになつた客……確かに、ローゼン君だつたかな」確かにローゼンの名前が出て私は思わず目を見開く。私は一度だつて彼のことを話していないのに。どうして、ゲイツさんには判つてしまつたのだろうか。

「どうして……」

「ふむ。どうして、か。最初はちよつとした違和感だよ。ミラちゃんは何かと彼のことを気にかけていたようだからね」

「そんなに接客態度に出でました？」

「他の客とは距離感が違つたからね。以前から、知り合いなのかなと」

「……」

どうやらこの老人には全てお見通しらしい。

そこまで言われて、私は白状する。

「はい。……あの人は、その……なんていうか……私の特別な人です」「そうかい。ということは、探している人つていうのも君のことなんだろうね。ミラちゃんはいいのかい？」

「……帰らなくていいのか、ということですか？」

鍋の火を止めて、鈍色の蓋をする。そこに写った私の顔は歪んで見えた。

「私から見ればミラちゃんは帰りたがっているように見えるけどね」
その一言に私は返す言葉がなかつた。「帰りたい」そう思つたことは何度だつてある。でも、勢いで飛び出した私が今更帰るだなんて言い出しづらいのだ。ローゼンが私を探しているのは判つている。それでも合わせる顔がなくて、どうしていいかわからない。どんな顔して帰ればいいのかわからぬ。

全てゲイツさんには判つていたのだろう。

やがて、答えない私に老人は続けて言う。

「料理を上手く作るには何が必要だと思う？」

「えつと……良い食材と良い調理器具ですか？」

「それも大切だね。だけど、もつと簡単で難しいものかな」

もつたいぶつたような物言いに私は答えを待つた。そして、ゲイツさんは微笑んで言つた。

「答えは愛情だよ。誰かを想つて作つた料理は必ず美味しくなるものさ」

「愛情……」

「ミラちゃんが最近作る料理にはそれが溢れている。君の料理する姿を見たら、すぐに判つたよ

「私つてそんなにわかりやすいですか？」

「ローゼン君と接する時だけ、本当に楽しそうにしているからね」

その言葉の意味を考えるまでもなく、私は動搖した。

「……気づいていたんですね」

「わかるさ。君が無理して笑つてることくらい。まあ、うちのバカな孫はそれすら気づいていないようだつたけど

みんなの前では笑っているつもりだったのに、それが作り笑いだつたことをゲイツさんは看破つていたらしい。本当の意味で笑顔になつたことなんていつ以来だろうと考えて……ふと、リサーナの顔が浮かんだ。

「私……」

「何も言わなくていい。君が来たあの日から、判つていたことだよ。いつか笑える日がくる、そう思つていたが……君を笑わせられたのはただ一人というだけだ。何も謝ることはない」

棚にあつたグラスを取り、磨き始めたゲイツさんは目も合わせないまま開店準備を始めた。

「さて、ミラちゃんは休んできなさい。まだ開店までは時間があるし、彼が来るのも夜だろう」

「はい。ありがとうございます」

私はなんとか表情を取り繕いながら頭を下げ、部屋に向かつた。



夜、酒場が繁盛し始めた時間帯、私は酒場で働きながらローゼンが来るのを待つていた。彼はいつも同じ時間にやつて来ては同じメニューを頼む。シチュードおすすめのお酒に一品料理、そして彼が店にいる間、会話を楽しむのが毎週の楽しみだった。

「いらっしゃいま……せ……？」

今日もまたローゼンがやつてきた。それはいいのだ。楽しみだつたし、待ち侘びていた。しかし、その隣には女性が一人くつついている。依頼で船に乗り込んだ時に見た『エンジエル』とかいう女。その女があろうことかはしたない格好でローゼンの腕に抱き着いていたのだ。しかも挑発的な視線を私に向けて、更に胸をローゼンに押し付けて……！

「な、なっ……！」

まるで「私のものだ」と言わんばかりの主張に私の心は搔き乱される。その上、ローゼンまで何故か微笑んでいるのだ。私には見せてく

れたことがない顔で、私じゃない別の女性に。

「あ、おねえさん。注文？」

「は、はい。……えっと、ご注文は？」

エンジエルに呼ばれて注文を取りに行く。その足取りは重く、まるで足が鉛のようで二人の座った席へ辿り着くまでが相当長く感じられた。エンジエルは挑発的な笑みを浮かべて、こう言う。

「じゃあ、取り敢えずローゼンが頼む“いつもの”を二人分

「……か、かしこまりました」

平静を装い伝票を書く。でも、何故か視界が滲んで前が見えなくなる。伝票の文字が見えなくて、泣かないようにしているのに、メモ帳が滲んで……。

「ゾゾつ、ガチ泣き!」

「ひつく…ぐすつ…」

エンジエルはびっくりした様子でこちらを見た。

私はなんとか目尻の涙を拭うも溢れてくる涙が止まらない。

いつかこうなることは判っていた。

それなのに、ローゼンの隣に立つ人がいざ現れるとなると感情が抑えられなくなってしまったのだ。

「あちゃく、思つたより効果的面だゾ。ジェミニ、もういいゾ」

エンジエルがそう言つた瞬間、隣にいたローゼンから小さく煙が破裂する。その中から現れたのは双子の人形みたいな形の星霊。双児宮のジェミニ。

「……へ?」

思わず私も間抜けな声を出してたじろいでしまつた。

ローゼンが消えた。……いや、ジェミニになつた。

この光景は前にも見たことがある。

確かに、ジェミニがローゼンに化けたのだ。
つまりさつきのローゼンは……。

「偽者!？」

「そうだゾ」

「よ、よかつた。じゃあ、ローゼンは」

「私と付き合つてるゾ」

ガン。私の持つていた木製の盆が手から滑り落ちた。

「冗談だゾ」

「な、心臓に悪いこと言わないでよ！」

「将来的にはそうなる予定だから嘘じやないゾ」

まさかローゼンがエンジエルと恋人になる……？ そんな未来あつていいはずがない。

「つて、どうしてあなたがここに……？」

闇ギルド『六魔将軍』の一人、エンジエルがこんな田舎の酒場に現れたことに私は嫌な予感を覚える。するとエンジエルが底意地の悪い笑みを浮かべてこう言つた。

「ローゼンと私が仲睦まじい姿を見せるミラジエーンはどう思うかな？と思つて」

本当に性格の悪い。闇ギルドの人つてこんなのがしかいないのか。

「そんなことをするため来たの？」

「そんなことじやないゾ。私は怒つてるんだゾ。……そう、例えばこの街の人間全部殺してもいいくらいに」

ゾツとするような悪意が放たれて、私は思わず身構えた。だけど、今の私にはどうすることもできない。魔法だつてろくに使えないのだ。闇ギルドの中でもタチが悪い六魔将軍を相手にするのは分が悪すぎる。

私は冷や汗を流しながら、エンジエルの様子を窺う。

「どうしてそんなこと……」

「そんなの簡単だゾ」

彼女は真剣な顔になつて、机の縁を指先で撫でる。

「ローゼンを傷つけた」

そして、あまりにも想像できない言葉を発して私を睨むように見た。

「だから私はおまえが嫌いだゾ。ミラジエーン」

「傷つけたつて……私が？」

エンジエルは「私がローゼンを傷つけた」と糾弾する。だけど、そ

れは無理な話ではないだろうか。私がローゼンを傷つけるなんて。不可能ではないだろうか。私が居なくなつたから傷ついた？そんなことつて……。

「え。気持ち悪いゾ。何笑つてんの性格悪いゾ！」

「性格悪くは…ない…わよ…」

多分。昔よりは言葉使いは柔らかくなつたし、お淑やかになつたつもりだ。今の私は子供の頃とは違う。エルザと喧嘩ばかりしてた私は。

「やつぱりおまえ嫌いだゾ。いつの間にかそんな胸がおつきくなつてるし」

「何処見て言つてるのよ…」

三大闇ギルドの六魔将軍エンジエルともあろうものが胸の大きさを気にしているというギャップに毒氣を抜かれて肩を落とした次の瞬間、彼女の口からとんでもない情報がもたらされる。

「ローゼンはやつぱり大きい胸の方が好みなのか」

「ちょっと待つてそれどういう意味？」

ローゼンが巨乳好き。何年も一緒に暮らしていくて知り得なかつた情報に興味を示すと、エンジエルは呆れたような顔をする。

「やつぱりおまえローゼンのこと何も知らないんだゾ」

「いつたいあなたに何がわかるの？」

「全部。ローゼンのことならなんでも知つてるゾ」

自信満々にエンジエルは胸を張つて、前開きの服の間から胸が揺れる。その魅惑の隙間に酒場の男達から興奮したような歓声が聞こえた。

「教えて。ローゼンのこと」

「嫌だゾ」

「お願い。なんでもするわ」

「じゃあ、その胸削ぎ落とすゾ」

「ローゼンは巨乳の方が好きなんですよ。嫌よ」

「じゃあ、交渉は決裂……と、言いたいところだけど」

エンジエルはトントンと机を叩いた。

「話が長くなるから、いつもの頃頼むゾ」
「わかつたわ。今すぐ持つてくるわね」

ローゼンが頬む“いつものメニュー”を机に置いて、匙でシチューを一口食べたところでエンジエルは口を開いた。

「ローゼンに昔、結婚を約束した女性がいたことは知ってる？」

開口一発目から思わぬ情報を聞き、私は思わず聞き返した。

「え？」

「その様子だと話していないのか」

まるで私には話したと言われているみたいだ。それが少し悔しいけれど、その話の内容が気になつて些細なことと割り切ることとした。それなりにローゼンとは親しかつたつもりだけど、本当は何も知らないにかつたんだと寂しい気持ちになつた。一番近くにいたつもりなのに、全然違つたのだからショックも大きい。

そんな大きな衝撃を受けている間にも、エンジエルは話す口を止めなかつた。

「ローゼンには恋人がいたんだゾ。でも、死んだ」

「そんな…………どうして……」

「結婚式を挙げる当日のことだゾ。突然、ドラゴンが村を襲つた」

「ドラゴンが本当にこの世界にいたの？」

「いたみたいだゾ。私は見たことないけど。確かにいるつてローゼンが言つてたんだゾ」

「でも、ローゼンならそれくらい倒せたんじや……」

「その頃のローゼンは弱かつたんだゾ。……そこからはまるで地獄のような光景だつた。ローゼン以外の村人は皆死んだ。ローゼンの最愛の人も、皆」

「そんな……」

「私、知らなかつた。ローゼンにそんな人がいたなんて。そんな過去があつたなんて。

「ローゼンは大切なものを失い過ぎた。だから、もうそんな思いをローゼンにさせないで欲しいゾ」

エンジエルが怒っていた理由も納得がいく。私にだつてその悲しみは痛いほどわかっている。大切な人が死ぬ悲しみ、それはもうローゼンが経験していたことだつたなんて想像もしていなかつたけど、今ならわかる。

「話はそこで終わりじゃないんだけど……まあ、私がおまえを気に入らない理由は理解してもらえたみたいだからいつか」

「……うん。気になるけど、やめておくわ。いつかローゼンから直接聞きたいかから」

いつの間にかシチューを食べ終えていたエンジエルは酒を片手にニヒルに笑つた。

「まあ、私としては一番邪魔な存在が消えてくれて大助かりなんだけど」

「邪魔な存在つて……」

「ローゼンを好きなのはあんただけじゃないってことだゾ。で、ジエミニ使って揶揄うと面白いから挑発して回つてたんだけど……」

「わざとやつてたの!?」

「あたりまえだゾ。私おまえのこと嫌いだし。本当はもつトイジメてやるつもりだつたけど、一発でガチ泣きされて萎えたんだゾ」

途中でやめるあたり、本当は悪い子ではないのか。エンジエルは続けて、

「ほつぺにちゅーしたり、一人で一つのドリンクを飲みまわしてみたり、はいあーんとかしてみたり」

「それ絶対ローゼンのこと好きな女の子の前でやつちやいけないやつよね」

「ウルティアにネタバラシしたらガチギレして一日中追いかけ回されたんだゾ。双児宮の鍵も奪われそうになつたし。でもまあ、ローゼンのコピーだから捕まることはなかつたけど」

そりやそうだ。ローゼンのコピーなんて反則ではないだろうか。戦闘用以外にしても。

「おかげで私は六魔将軍最強なんだゾ」

「絶対に渡しちゃいけない力が闇ギルドに渡つてる……」

もしかしたら、国を滅ぼせるのかもなんて危惧をするが、エンジエルとはなんとなくシンパシーを感じる。同じ人を愛する者として。

「でも、ローゼンの力を使って悪さをするつもりはないんでしよう?」

「当然だゾ。殆ど観賞用だし」

グラスが空になつたところで、エンジエルは立ち上がる。

「じゃあ、私は帰るゾ」

「うん。またね」

「またねつて、次もここにいたら『いらないなら私が貰うから』覚悟しておくんだゾ」

エンジエルは店を出て行く。リサーナと同じ言葉を残して。

言い逃げ

エンジエルが帰った後、一時間経つた頃にローゼンが来店した。店の隅、いつもの席に座つた彼を確認して、私は注文を取りに向かおうとした瞬間、誰かが隣を横切つた。

ロナルドさんだ。サービスの水をグラス一杯持つて、ローゼンの席に行き立ち止ると同時にその中身を彼に向かつてぶちまけた。

「え……？」

予想外の行動に驚き、私は慌ててローゼンに駆け寄つた。

「ちょっとロナルドさん何やつてるんですか！ ローゼン大丈夫!?」

「問題ない。すぐに乾く」

「待つててすぐにタオル持つてくるから！」

「必要ない。少し離れていろ」

タオルを取りに行こうと少し離れた隙に、ローゼンの身体から火が噴き出る。数秒間、炎に包まれたかと思うとやがて火は小さくなり、消えた時には完全に乾いた状態だつた。

「さて、言い訳を聞こうか？」

「煩い黙れ！ ミラちゃんがいるくせに他の女に浮気しやがって！」

「……？」

きよとんと首を傾げるローゼンに私も首を傾げる。何を言つているのか判らず、ローゼンは私を見て「どういう意味だ」と問う。

「とぼける気か！ さつき変な格好をした女と一緒に店に来ただろう！」

“変な格好をした女”というワードに私はついさつきまで来店していた星霊使いの姿を思い浮かべた。言葉をだいぶ濁しているが、ロナルドさんはさつきの格好を思い出したのか顔をだいぶ赤くしている。

当然、ローゼンはそんなことを知るはずもない。今までだつて一人で來ていたのだから思い当たる節もなく、徐に激昂するロナルドさん

の額に手を伸ばした。

「なつ、何を……！」

「……ふむ。なるほど、そういうことか」

触れた瞬間、ピリッと火花が散つてロナルドさんが後退り、その様子に目も暮れずローゼンは呟いた。

「エンジエルが来たんだな」

今の一瞬で状況を把握したローゼン。

誰も話していないのに何故——。

そう考えて、ひとつだけ思い当たる魔法があつた。

他人の記憶を読む魔法。思考を共有する魔法。そのどれもが使い手を選ぶ者だ。誰もが習得できるわけじゃなく、相応の思考処理速度が無ければ習得出来ないと言われているレアな魔法だ。

『ローゼンだから』で納得できるだけ、私も彼に毒されているのかもしれない。彼なら出来て当然と思つてしまふ自分がいる。

「ミラちゃんもこんなやつの何処がいいんだよ！」

ローゼンと私が怒涛の展開に置いてけぼりにされていると、ロナルドさんはさらに声を荒げた。そんなに「ミラちゃん」と連呼しないで欲しい。今までお互に名乗らず上手く演つてたのに。

——でも、本当は薄々は気づいてたんじゃないかと思う。

酒場の客は私を“ミラちゃん”と呼ぶ。今でこそ昔とは全然違う私だけど、そう呼んだなら気づいたつていいはずだ。それにローゼンがここに來るのだつてきつと私がいるから。何よりも私がそう思いたくて、それでも私達は素性を明かさなかつた。なんだか、怖かつたから。

「何を勘違いしているか知らないが、さつき來た俺に似た奴は俺じゃない」

「訳の分からぬ言い訳を並べ立てやがつてそれでも男か！」

淡々とローゼンが事実を述べるも、ロナルドさんは聞く耳を持たなかつた。確かに私も初見では気づかなかつたけれど、一般の人には馴染みのない魔法なのか、さつきのジェミニをローゼンだと思つてゐるようだ。終いにはとぼける彼に掴みかかつて凄い剣幕で捲し立てた。

「ミラちゃんはなあ泣いてたんだぞ！」

「おめえミラちゃんを泣かせたんだつてなあ？」

「この街のアイドル泣かせたらただじやおかねえぞ！」

「そうだそだ帰りやがれ！」

常連さんまで混じってヒートアップ。彼一人を取り囲んで責め立てる様子にどうしていいか判らず、でもこのままローゼンを追い出されると私にも不都合なわけで、困窮した私は咄嗟に声を張り上げた。

「やめてください！」

酒場に響き渡った私の声で、ようやく沈静する。

男達の酔つて赤くなつた顔といつたら、もう……。

「違うんです。さつきの、えつとローゼンっぽい人は魔法で！」

「魔法だあ……？」

「偽者なんです」

「なるほど。じゃあ、仕方ねえな」

ローゼンの説明では納得してくれなかつたのに……そう思つている間にも人垣は消え、やがてロナルドさんだけが残つた。

「ロナルド」

「げつ、じいちゃん」

「話をややこしくするな。まつたく」

「だけど……」

「これはミラちゃんの問題だ。それと、彼の」

バーカウンターで他の客の接客をしていたゲイツさんはロナルドさんの襟首を掴むと引き摺つて奥へ引っ込んだ。その様子を苦笑いして眺めている間に、ローゼンは立ち上がりつて。

「邪魔したな。今日は帰ろう」

酒場を出て行つてしまう。

「あ……」

その背中に手を伸ばしかけて、虚空を掴む指先。

胸が騒ついた。もう来てくれないんじやないかつて。

どうしてそう思ったのか、つて聞かれても私もどうしてか判らない。私の知らないローゼンを知つたからか、彼の背中が何処か寂しそ

うに見えて。

私は考える前に酒場を飛び出した。

酒場の外に出るともう既にローゼンの姿はなかつた。

何処に、どつちに向かつた？

私は直感のままに街の入り口の方へ。

そこでようやく見慣れた背中を見つけた。

「ローゼン！」

呼び掛けた声に反応して、立ち止まる彼。

「何だ？」

対応は冷たい。でも、懶々立ち止まつてくれるところが昔出会つたばかりのローゼンと全く同じで、不器用で非情になりきれない優しさを感じさせてくれる。そこが、好きで。

「はあ…はあ…」

ヒールの高い靴で走つたからか足が痛い。息を整えるために立ち止まつて大きく深呼吸、衝動的に駆け出してきたからか何を言えればいいか判らず、引き留めるだけ引き留めて何も思いつかなかつた。
「ねえ、もう気づいてるんでしよう？」

だから、あくまで他人を装う彼に直球をぶつけてしまう。

「どうして名前で呼んでくれないの？」

彼は一度だつて名前を呼んでくれない。酒場の人は『ミラちゃん』つて呼ぶのを知つてゐるはずなのに。

「どうしてここに来てくれるの？」

私に逢いに来てくれてるんだつたら嬉しいだなんて、直接は言えないけれど。そうだつたらいいな、と思つてゐる自分がいる。

「どうして連れ戻そうとしないの？」

あなたが『帰つてきて欲しい』つて言つてくれたなら、私はすぐにもあなたのところに帰るのに。そう言つて欲しい自分がいて。言つてくれないことに寂しさを覚える。

私は待つてゐる。いつまでも。ローゼンに必要とされるのを。愛し

てもらえるのを。

目頭が熱くなつて、涙が溢れて。視線の先の彼が静かに私を見つめ返していることだけはわかっているんだけど、涙で滲んでよく見えない。

「ミラ」

夜空に溶けるような声が届いた。

私の名前を呼んでる。

ローゼンが呼んでくれるのが、嬉しくて。

同時に怖くもあつた。答えを訊くのが。

「……綺麗になつたな」

そんな時に予想もしないことを言われて、私は惚けた。

「えつ？」

「最初にお前を見つけた時、半信半疑だつた。魔力は一致しているのに別人の姿をしてるんだ。それに急激に成長していく本人なのかどうか確証がなかつた」

「……そう、なんだ」

珍しく戸惑つた様子のローゼン。

私の変化は、彼を驚かせることになつたらしい。
それがどんな意味であれ。

ローゼンを出し抜いたことが少し嬉しい。

「どうして此処に来るのかつて言われてもな……。あの時のおまえは自暴自棄だつたから、その様子見を兼ねてと言つたところだろう」
普段は疑いもしないローゼンの言葉に違和感を覚えた。

「ねえ、それは……ローゼンがそうだつたから?」

私は踏み込む。今まで干渉してこなかつた領域に。ローゼンの隠している心に。ローゼンの隠している過去に。
するとローゼンは一瞬、驚いた顔をした。

「何を言つている?」

「エンジエルから聞いたの。ローゼンには昔好きだつた女性がいるつて」

「エンジエル……ジエミニ……そつか、そういうことか」

一人納得した様子でぼそぼそと呟くと、彼は視線を宙に彷徨わせながら言つた。

「何処まで訊いた？」

「……大切な人が、ドラゴンに殺されたつて……」

「それで終わりか？」

「……うん。私が訊いたのはこれだけ」

瞑目したままローゼンは俯いた。

「どうして連れ戻そうとしないか訊いたな。……俺にはその資格がない」

今度の声は、夜に消えてしまいそうなほど弱々しい。

そう言われて私も黙つていられなかつた。

「ローゼンがまだその人のこと好きだから？」

無言。それを私は肯定と捉える。胸が少し痛い。けど、怯んでなんかいられない。私はもう我慢することも逃げることもやめる。そもそもしないと彼は私のことを見てくれないから。何よりもリサーナとの約束なのだ。妹とした最後の約束、守らないなんてお姉ちゃんじゃない。

「それでも私はローゼンのことが好き。忘れろなんて言わないわ。ねえ、私を見て。もう子供じやないのよ」

女として見てほしい私の告白。きっとローゼンは一度だつて私のことをそういう相手として見たことがない。そう思つて言つた、けど……。

「……知つてるさ。ずっと前から」

ローゼンから返ってきた言葉は予想の斜め上。

彼は私を直視しないままに言う。

「俺にはかつて……いや、今でも忘れられない人がいる。だが、それと同じくらいおまえも大切に思つている」

「え、それって——」

言葉の真意を問いただそうとした直後、夜の闇に消えるようにして彼はいなくなつた。

「転移魔法?ええ、ちょっと、なんで逃げるのよ!」

逃げた先であろうマグノリアの方角に向かつて、夜に叫んだ。

昼間の珍客

あれから一週間過ぎてもローゼンは酒場へやつてこなかつた。最初に逃げたのは私だけど、突然来なくなると不安になつてしまふ。もしかしたら仕事で怪我をしたり、何かあつたんじやないかと。私がマグノリアから逃げ出した時もローゼンがこんな気持ちを抱いていたのだとしたら、なんて考えて少し申し訳なくなつてくる日々だ。

そして、更に三日後。思わぬ客が昼間の酒場に來た。

「姉ちゃん！」

酒場の扉を乱暴に押し開き、乱暴に押し入つて來た筋肉の塊。その男は店の中を見回してもう一度探し人を呼んだ。

「姉ちゃん！何処だ!?」

エルフマン。私の弟。彼が何故、こんなところにいるのか。いやそもそもローゼンが此処を知つていいのだから、いざれ来るとは思つていたが割と急に來たもんだからびっくりして接客に使つている盆を取り落とす。と、エルフマンは一瞬こちらを見て再度店内を見廻し始めた。

「姉ちゃん何処だ！いるんだろう！返事してくれよ！」

あまりにも大声で叫ぶものだから私も恥ずかしくなつて、落とした盆を拾つて口元を隠しながら応えた。

「煩い。聞こえてるわよ」

「えつ、ね、姉ちゃん……？」

声の発生源、私の方を見てエルフマンは固まる。そして、目をパチクリとまばたきさせ驚いたような顔。

「え、本当に姉ちゃん？」

「エルフマン。わかるでしよう」

「……うおおおおん！漢おお！」

私のことをやつと姉だと理解すると、今度は泣きながら抱き着かれた。姉離れたと思ったのに……いや、そもそも何も言わず勝手に出

て行つたのだから仕方ないのだろう。私は受け止めて、優しく弟の頭を撫でる。

「姉ちゃん！急にいなくなつちまうもんだから……！本当、心配で！」
「ごめんなさいねエルフマン。心配、懸けたわよね。でも、もう大丈夫だから」

沢山のお客さんに見られながら、私は泣き続ける弟を慰めた。

「それでどうしてエルフマンが此処にいるの？」

やつと泣き止んだ弟と店の二階、私の部屋で向き合う。するとエルフマンは腕を組み言う。

「決まつてんだろ。姉ちゃんを連れ戻しに来たんだ」

「連れ戻す、ね」

「……それとな姉ちゃん」

弟はまるで怯えたように、肩を縮こまらせた。

「兄ちゃんと喧嘩した」

「え？」

思わぬ言葉が弟の口から出て思考が停止する。『兄ちゃんと喧嘩した』とはつまり、ローゼンと喧嘩したということだ。今まで一度だけエルフマンがローゼンと喧嘩しただなんて見たことも聞いたこともない。いや、そもそもローゼンが喧嘩するだなんて想像が出来ないのだ。むしろその理由に興味が沸いた。

「なんでそうなるの？」

「その……兄ちゃんが姉ちゃんを連れて帰らないから、口論になつて」「ローゼンと口論？」

いや、エルフマンじやそもそも勝てないだろう。私だつて言い合つて勝つことなんて殆どない。別に喧嘩とかじやないけど、少しわがままを言つたりしただけの話だ。

「いや、口論つて言うと語弊があるんだけど。どつちかつて言うと俺が勝手に言つてるだけでさ。冷静じやなかつたのは俺だけで、兄ちゃんはいつも通りだつたし」

ローゼンは喧嘩をしない。少なくとも、魔導書一冊コーヒー溢した

くらいで怒られたこともなかつた。そういう時はローゼンは決まって私達が火傷しないか心配してくれたのだ。

「……でも、兄ちゃんが本当はさ。姉ちゃんに帰ってきてほしいはずなんだ」

「ローゼンがそう言つてたの？」

「そう言つてたつていうか、姉ちゃんがいなくなつた時、兄ちゃん凄い焦つてたし、結構探し回つてたから」

「ふふつ、 そうなのね」

「なんで笑つてるんだよ姉ちゃん……」

思わず微笑を浮かべてしまい、エルフマンはそんな私の様子を見て困惑していた。

「思つたよりも大事にされてたんだなつて」

「俺も気が気じやなかつたよ。姉ちゃんが急にいなくなつて」

「本当にごめんなさい」

リサーナがいなくなつて、日が経たないうちに今までいなくなつて。エルフマンには本当に心配させたと思う。逆の立場になるときっと私は耐えきれなかつたに違いないのだ。だから、エルフマンには本当に悪いことをしたと思つている。

「それでローゼンは今どうしてるの？」

「兄ちゃん？」

「いつもは一週間に一度、来てくれるのに来なかつたから」

「あー、そういうえばたまに様子を見に行つてるつて言つてたなあ。そ
ういえば最近はあまりギルドにも顔を出さないけど
「そうなの？」

いつも通りと言えばそうかもしれないが、エルフマンが言うなら
よっぽどのことなんだろう。私がギルドにいる時は割といたような
気がするけど。

「それにしたつて随分と遅かつたわね」

私の予想ではエルフマンは私の居場所を知ると真っ先に飛んでくる、と思つていたのだがローゼンが見つけてからだいぶ時間が経つている。姉離れたということなのだろうか。

「いや、真っ先に飛んでいこうとしたんだけど。兄ちゃんが今はそつとしといてやれって」

——そんなことは全くなかつた。

「それでしばらくしてから兄ちゃんが行けないから俺に行つて来て言つたんだ」

「そうなのね。それでローゼンはどうして行けないつて？」

「いや、喧嘩して全く訊いてなかつた」

肝心なところを聞いてないあたりエルフマンらしいというか、やっぱり彼を捕まえるには自分で行くしかないらしい。エルフマンも改まつて言う。

「姉ちゃん、戻つてきてくれよ」

本当はローゼンから意地でも引き出したい言葉だつたけど、弟にそう懇願されでは仕方ない。迷惑かけちゃつたし私も随分と落ち着いた。今なら戻れそうな気がする。

「うん。わかつたわ。……つていうか、もうその準備始めちやつてたのよね」

ローゼンとあの日話してから一週間、来なかつたから私も既に行動を移していた。今までお世話になつた近隣の人達に街を離れる挨拶をしたり、使つていた部屋の掃除や整理なんかも毎日していた。

私があの日、勝手にマグノリアから出て行つたように。今度は勝手に帰つてローゼンに「おかげり」つて言つてやるのだ。「ただいま」でもいい。驚く彼の顔が目に浮かぶ。

「姉ちゃんすつごい悪い顔してる」

「うん、なんだか楽しみになつちやつて」

「兄ちゃんと何かあつたのか？」

「うーん。やつぱり待つてるだけじゃダメだから、捕まえようかなつて」

そう言つた瞬間、何故かエルフマンの顔色が悪くなる。ちよつとの反応は失礼じやない。

「なにその顔、言いたいことでもあるの？」

「いや、だつて姉ちゃん……姉ちゃんが追うつて言つたら捕まえるま

で止まらないだろ。それこそ地の果てまで追い掛けられる兄ちゃんを思うとなんか……同情する」

「それはエルフマンとリサーナが悪いことをするからでしょ？」

「そりや昔に兄ちゃんと姉ちゃんの仲を揶揄ったのは悪かつたと思ってるけど、何もしてない兄ちゃんが追われるのはなあ」

「何もしないローゼンが悪いと思うの」

「そう。何もしないローゼンが悪いのだ。むしろ逃げたから追うことになつてゐるんだけど、さすがにそこまでは弟に話す気はない。彼の過去を勝手に話すのは気が引けた。」

「まあ、兄ちゃんつて結構ドライな性格してるからな。それにしても姉ちゃんこんな部屋に一年も住んでたのかよ」

納得したように大きく頷くと、改めて部屋を見回す。

何もない質素な部屋。あるのはベッドとクローゼット、それから机と姿見くらい。他には何もないし、机の上には纏めておいた私の荷物が置かれているだけだ。

片付けをしたから、という単純な理由ではない。借りた当時からこうだ。私物なんて殆ど買わなかつたし、持つてこなかつたのだ。あるものといえばマグノリアの家から持つてきた家族写真と絵本くらいで……。

「あ、これ……」

その絵本を見つけたエルフマンは凝視したまま動かなくなつた。「リサーナが子供の頃にローゼンに買って貰つた絵本。持つて来ちゃつた」

「大事にしてたもんな」

買って貰つてからずつと肌身離さず持つていたのだ。少し大人になつた今でも、部屋に大事に仕舞つてあるくらいで、子供の頃には毎日読み返していた。そのおかげで私まで内容を覚えてしまつた。

「夢幻の泉」

私とエルフマンの声が重なる。

「なんだつけ。確か死んだ大切な人に会えるつて童話だつたような……」

「そうそう。病氣で死んだ母親に娘が会いに行くつて物語で……最後は、一緒に仲良く暮らしたとかそんな内容だったかしら」

二人で開けてパラパラと頁を捲ると、そんな内容の物語が可愛らしい絵で描かれていた。最後は母親と笑って一緒に暮らす少女の絵が描かれていて、ハッピーエンドで終わっている。著者はよく知らない人。童話作家の中では有名なかも知れないが、私とエルフマンは知らなかつた。

少しだけ懐かしんだ後、絵本を閉じて忘れないように鞄に仕舞う。
「いつ出発するんだ？」

「二日後、マグノリアに帰るわ」
もう決めた。後戻りはできない。

思い出の庭

「久しぶりだなエルフマン」

家に来て誰かを探すような素振りを見せる男に俺は、苦笑しながら出迎えた。

エルフマンが探している相手は誰だかわかりやすい、約一年前に出て行った実の姉だ。その姿がないのを確認すると少し残念そうに肩を落として、対面のいつも通りの席に座る。その席はかつてこの家に住んでいた時、エルフマンが座っていた指定席だ。迷いなくそこに座ると不安そうな面持ちで俺を見る。

「俺に話があるって聞いたんだけど」

「ああ、おまえに頼みがあつてな」

「兄ちゃんが俺に頼み事？」

随分と珍しい事に感じたらしい。エルフマンは訝しげに首を捻る。それもそのはず、俺が誰かに頼み事をするのはいつ以来だろうか。いなくなつたミラを探すためにギルドのメンバーに声を掛けて以来になるかもしれない。それ以外、エルフマンを頼ることは中々なかつた。

「まあ、頼みと言つても別に難しい事じゃない。ミラのことだ」「姉ちゃんがどうかしたのか？」

姉の話と聞いてエルフマンは妙に食いついてくる。身を乗り出しそうなほど前傾姿勢になると、机がギシギシと音を立てて揺れた。
「ミラの様子を見に行つてほしい。場所はここだ」

そんな様子のエルフマンに俺は地図を取り出し、彼の実の姉がいる街を指し示す。

「どうしたエルフマン？」

待つても了承の返事がない事に首を傾げると、エルフマンは眉根を寄せて言う。

「兄ちゃんは行かないのか？」

「他に行くべき場所がある」

「それは姉ちゃんと会うよりも大事な用なのか？」

そう聞かれると応答に困る。大事なのかもしれないし、大事じやないかもしない。俺が即答しない事に業を煮やしたエルフマンは真面目な顔で問う。

「なあ、兄ちゃん。兄ちゃんは姉ちゃんのことどう思つてる？」

「それはどういう意味だ？」

「兄ちゃんは姉ちゃんに帰つて来てほしくないのかつて事だよ」

「それはミラが決めることだろう」

「違う！きつと兄ちゃんが本気で望めば姉ちゃんは帰つてくる！ずっとその言葉を待つてゐるはずなんだ！」

声を荒げて席を立つと、こう叫ぶ。

「今、兄ちゃんは漢じやねえ！」

それだけ言い残してエルフマンは家を出て行つた。



マグノリアを出て南の森へ進む。方角は何処へだつてよかつた。泉さえあればどこでも、その条件に当て嵌まるのが南にある大きな泉だ。

ただ“×”に逢いたい”と思う気持ちさえあれば、あとは向こう側から招かれる。

「霧が出てきたな」

森の中に霧が出始める。次第にそれは足元も見えないような濃霧に変わり、その中を迷うことなく歩いていくと急に霧が晴れた。

さつきまで森の中にいたのに、広がつていた光景はまるで違う。一面の花畠と泉があり、隣には木が一本生えていた。その向こうを見れば地平線が広がつており、空と地の境界が見渡す限り続いている。

俺は迷うことなく一步を踏み出し、泉の上に足をつけた。すると足は沈むことなく水面に乗り、波紋が生じる。その上をまた一步進みある程度進んだところで立ち止まる。

そこで泉に変化が起きた。波紋の中に見える景色が歪み、俺以外の誰かの姿が映る。そして、泉から霧のようなものが湯気のように舞い上ると、それは……。

『おかえりなさい、ローゼン』

ミラの姿になつた。

『ローゼン？ どうして泣いているの？』

これで一つの答えが出てしまつた。目の前にミラの偽者が現れたことが何よりの証明だ。だが、それを受け入れられない自分がいる。だからこそ俺は結果を否定した。しなければならなかつた。

「違う。俺が逢いに来たのはおまえじゃない」

偽者のミラは寂しそうな顔をして微笑む。その姿に胸を刺すような痛みを覚えた。

「ああ、わかつた。そつちがその気ならこっちにも考えがある」

俺は虚空から杖を取り出すと魔力の圧縮を開始する。尋常ならぬ魔力量に空間が揺れ、軋むような音を鳴らしたところでミラの姿のまま泣きそうな顔で懇願する。

『わあー、わあー、ごめんなさいマスター！ だからやめて！ これ以上は壊れちゃう！』

『だつたらミラの声で喋るな、顔で泣き顔するな、消去するぞ』

霧散した魔力が霧となり、泉の中へと吸い込まれていく。

杖を仕舞つたところで、『ミラ』は怯えたように俺の様子を窺いながらも告げる。

『そつは言つてもマスターが『魔法（わたし）』をそういう風に作つたんですよ。私は迷い込んだ人間の記憶を読み取り、感情を抽出し、忠実に再現しているだけですから。その人にとつて大切な人を』

白々しくも『ミラ』はそう言い切ると、昔のような小悪魔的な笑みを浮かべて人をおちよくつてくる。

『マスターだつて理解しているのでしょうか。マスターが私をそう認識したのなら、そういうことです』

『失敗作だな、消そう』

この魔法を失敗作とする所以は、本来魔法にないところにある。

元々この魔法は対象者の記憶と感情を読み取り、最も大切な者を再現するように作られているのだが、その過程で沢山の人間の情報をインストールした結果、偶然にも“自我”を獲得してしまったのだ。それ以来こいつは淡々と人の嫌がることをする嫌な魔法になってしまった。

『この私を失敗作だなんて言うんですね。大昔に死んだ愛する人のことを忘れられずメソメソメソメソと泣きながら創造した、この私を』頬を膨らませて怒る“ミラ”はなおも毒を盛ることを忘れず、創造した主人である俺に対してそう言い放つと、すすつと移動して俺を目遣いで見上げる。

『あ、いまドキつてしまいましたね』

「性格悪いなおまえ」

『それはもちろん、この世界からマスターがいなくなつてから老若男女様々な方をお招きしましたから。喜怒哀楽から憎悪やその他諸々の感情まで理解しています。毒を食らわば皿までです』

良くない感情を識るのは人間を理解する上で必要な事だろうが、魔法の特性上そういう仕様だったのだ。今ではそれすら娯楽として楽しんでいるようであるが。

『しかし、まあ……』

ロングワンピースのスカートを摘みながら、“ミラ”は自分の身体を確認するように見回す。

『この恵体によく襲いかかりませんでしたね。性欲枯れてるんじやないですか？』

「煩い」

『何百年と生きる間におじいちゃんですからね』

「誰がおじいちゃんだ」

『ええ、わかっていますとも。マスターの身体は十八歳のまま。所謂、永遠の十八歳というやつですね』

どこで覚えたのかそんな台詞を吐くと、済ました顔で淡々と続ける。

『つまり、マスターは年中発情期です』

「もうおまえ口閉じろ」

『嫌ですよ。せつかくマスターと会えたのだからお喋りしたいです』

「もつとマシな話をしろ」

『それなら一つ聞きたいことがあります』

『ミラ』は真剣な顔で問う。

『拾つた娘を自分の花嫁候補に育てあげた今のマスターの気持ちは？』

『そんなつもりで拾つた覚えはない』

『当時のマスターがあの娘を拾つたのは“気まぐれ”などではなく、必然でしょう。将来的にそうなる予定はなかつたにしても、今のマスターとミラジエーンの気持ちは通じ合っていると思いますが』

何を知つているのか、『ミラ』は断言する。

『お忘れですかマスター。私は大魔導師ローゼンの創造した唯一無二の結界型魔法《思い出の庭》です。その効果は対象の記憶と感情をインストールし、愛する人を忠実に再現する。今の私の姿がミラジエーンに見えるのは、マスターがその者を世界で一番に愛しているからです』

……まさかその仕様が今更思々しくなるなど、誰が予想しただろうか。

『占有率はミラジエーンの方が上。マスターはそれを確かめに来たのでしよう？』

『知りたくない結果だつた』

『私はマスターの創造した魔法ゆえに、誤作動はありませんので』
逃げ道すら塞いでいく『ミラ』。

主人に厳しい、嫌な魔法だ。

「……少し一人になりたい」

『ではまた後ほど』

『ミラ』は発光すると、泉の中に吸い込まれるように消えた。

眩むような光へ

旅立ちの朝は早かつた。マグノリアに帰る前日にはあまりにも寝付きが悪くて、眠りについたのは深夜を過ぎた頃だった。それでも私は早くに目が覚めてお世話になつた酒場を去ろうと階段を下りる。

「おはよう、ミラちゃん」

「ゲイツさん？ おはようございます」

誰も起きていない時間帯のはず……と思つていたものの、酒場にはマスターの姿があつた。

「これを弟君と食べなさい」

バーカウンターの上には二人分のお弁当が並んでいる。ゲイツさんは優しい笑顔でそれを差し出した。

「ありがとうございます。ゲイツさんには色々とお世話になつて」

「いいさ。旅は道連れ世は情け、年寄りのお節介だよ」

受け取るとなんでもないという風にゲイツさんは謙遜する。

「彼と上手くいくといいね」

「はい！ お世話になりました！」

最後に恋の激励まで貰つて私は酒場を出る。本当は昨日のうちに挨拶を済ませていて、朝早くに出るから見送りはいいと言つたのにゲイツさんはお弁当まで作つてくれていた。そのことに感謝しながら、酒場を出たところで外観を全て視界に収められる場所で、私は一度だけ振り返ると一礼する。

「……本当にありがとうございました」

誰にも聞こえないだろうけれど、感謝の気持ちをこの場所にも伝えたくて。胸が熱いまま顔を上げると反転し、街の入り口へと向かう。そこには柱に寄りかかる男の影。

「もういいのか、姉ちゃん」

「ええ。行きましょう、エルフマン。きっとローゼンが待つてるわ」

朝焼けに染まる街は、今までで一番綺麗に見えた。



湖畔の街を出て二日、まだマグノリアには着かない。

旅の道中、困ったことに魔物が出ると立ち寄った村から話を聞いて、エルフマンと一緒に討伐に向かつた。エルフマンは私に村に残るようと言つたけど、私はその提案を拒否して同行した。

今私はきっと戦えない。だけど、せめて弟の側にいたかった。それからなんとか魔物を見つけて討伐、村から出て次の街を目指している間に夜になつた。今は見つけた泉の側で野宿をしているところだ。

「姉ちゃん大丈夫か？」

「平気よ。元魔導師だし、S級だつたんだから」

姉は弟より強し、と言うとエルフマンも納得はしないながらも引き下がる。

「でもちょっと久しぶりだから、少し楽しいかも」

ゆらゆらと揺れる焚き火を見ていると、何故か少しほつとする。懐かしいけど、暗闇の中に灯る小さな火に少し寂しさを覚えながら、私はもう一人を幻視する。

「でもまたこうして旅をするなんて、思つてもみなかつた」

そこにはリサーナがいた。

「いつか帰る気はあつた……のかな。多分、ローゼンが私を見つけてくれないとずつとあそこにいた気がするけど」

「でも、兄ちゃんよく見つけたよな」

この広い世界で、私を探して、私を見つけて。一年以上も諦めなかつた彼は、今度は私を見守つて。それは例えるなら“父親”みたいだなんて思つてしまふけれど、それ以上に私にとつてローゼンは特別だつた。

“家族”なんて言葉は生温い、“特別”の中でも“特別”で。それが“恋”だと気づくのに時間は必要なかつた。私は最初から、出会つたあの日から、ローゼンのことを好きになつていた。

「早く、会いたいな……」

「じゃあ、明日も早いし寝ようぜ」

「そうね」

明日の出発の時間も早い。

寝る前に水を汲みに行こうと立った時だ。

「霧が……」

急に霧が出始める。それは焚き火を搔き消すと足下を隠し、一際強い風が吹いたかと思うと全身が包まる。

「姉ちゃん!？」

まるで私を攫うかのように霧が私と弟を引き離す。エルフマンの声も、姿も、気配も消えた。

足下どころか方向さえ分からず、私は立ち尽くす。

「エルフマンー、どこにいるの!?」

近くにいるはずと思つて声を張り上げるも、返事はない。

本当に霧に攫われたようだ。

こういう時、どうすればいいんだっけ?

どこかで聞いたような気がする。そういうえば、こんな話を前にもどこかで……。

霧の中で思案している時だつた。

「つ、リサーナ!？」

銀髪の少女が霧の中を横切る。その後ろ姿は一年前に死んだ妹に似ていて、だが一目で妹だと分かつた。リサーナが消えた霧の中に私もまた足を踏み出す。

「リサーナ!待つて!」

必死に呼ぶもりリサーナは止まらない。そのまま光に向かつて走るリサーナを追つて、私も霧から飛び出した。

「ここは……?」

霧の向こうに広がっていたのは一面の花畠。泉の横に木が一本生えていて、周りを見渡すと遠くには地平線。それも終わらない世界が続いている。

リサーナはいない。けれど、代わりに木に寄りかかるようにして男

が眠っていた。

「ローゼン？」

見間違えるはずもない。

高鳴る胸の鼓動に鼓膜が揺れる。

私は心臓が早鐘を打つのを感じながら、彼の側に歩いていく。

そうして隣で膝を落として、私は彼を振り起こす。

「ねえ、起きて。……起きて、ローゼン」

数秒揺すっていると、ゆっくりと目蓋が持ち上がった。

ローゼンは寝惚け眼で私の顔を見上げると、また目を閉じる。

「あと十年は起こすな」

「十年もローゼンと一緒にいられるのは嬉しいけど、それはちょっと……」

「わがままだな。俺が創った魔法のくせに」

寝惚けているのかローゼンは私を何かと間違える。魔法で創り出した幻と思ったのか、私をいないものとして無視し始めた。

「ねえ、ここはどこなの？」

「……ついに魔法式にバグが発生したか」

薄目を開けて木に寄り掛かり直し、ローゼンは私を見る。

それから数秒、ローゼンは目を見開いて驚く。

「ミラ？ 何故お前が此処に……！」

「それが急に霧に包まれたと思ったら、こんなところにいて……」

そう説明すると、ローゼンは不可思議な顔をした。

「此処に入れるのは一人のみの筈だ。他の人間が迷い込むなどありえない」

ローゼンが断言するならば、そうなのだろう。ならばどちらかが偽者か。そんなはずはないと私の心が訴えている。目の前にいるのは間違いなく本物のローゼンだ。

そして、そう感じたのはローゼンも同じらしい。私が偽者という可能性は否定し、別の可能性を口にする。

「ああ、そうか。おまえ俺を嵌めたな」

虚空に向かつて誰かに呟くローゼンの声は忌々しげだけど、表情は

それほど嫌そうじやない。

それはそれとして私も気になることが一つ。

「ローゼンはどうして此処にいるの？」

「その説明をするにはまずは此処がどういう場所か知る必要があるだろう」

「魔法なのよね。これだけの大魔法、普通じやないとと思うけど……」

今のもわかるくらいこの場所は魔力で満ち溢れている。温かくて、優しい匂いがする、幻想的な世界。それと何故か懐かしさを感じる不思議な気持ちにさせてくれる場所だ。

「リサーナに買つてやつた童話があつたろう」

不意にローゼンがそう切り出す。今も私の鞄の中にある、あの絵本。

今はエルフマンが持つてゐるだらうけど、それがいつたいどうしたというのか。

——そして、気づく。

あの童話の話は、此処がモデルになつてゐんじやないかと。

「じゃあ、さつき私を呼んだリサーナつて……」

ローゼンは呆れたような顔。

「魔法の仕業だな」

「そうなのね……」

リサーナは死んだ。そんなの分かりきつていたはずなのに私は期待してしまう。本当はリサーナは生きているんじやないかと。だけど、この一年帰つて来ないあの娘を思うと、その可能性も現実的ではないことは薄々わかっていた。

「でもね、なんだかりサーナが私とローゼンを引き合わせてくれたみたい」

こんなところで逢える奇跡を神様の仕業じやないんだとしたら、きっとリサーナが導いてくれたようなそんな気がして、私はローゼンの手に手を伸ばした。

「大切な人に逢える場所、本当みたいね」

ローゼンの手の甲を指先でなぞり、探るように指先を指へと絡める。するとローゼンは戸惑いながらも手を裏返して優しく握り締めてくれた。

予想だにしなかった反応に、私の心臓が跳ねる。

「ねえ、ローゼンは誰と逢ったの？」

此処で。この場所で。誰と。

聞こえているはずなのにローゼンは沈黙したままで、この反応には覚えがあつた。

答え難い質問に対し、答えを探している時の逡巡。

答えは決まっているはずなのに、どうしてなのだろうと思うまでもなく、私の頬は真っ赤に染まる。

「……私？」

ピクリと指先が震える。まるで心臓の鼓動が血管を通つて指先に伝わつたような反応に私は確信する。

「そつか。ふふつ、なんだか恥ずかしいわね」

「俺は何も言つてないんだが」

「もう何年一緒にいると思つてるの？ ローゼンが考へてることくらい、ちよつとはわかるわよ」

そう指摘されるとローゼンはバツが悪そうな顔になる。

「……だけど、知らないこともあるわ」

ローゼンの過去、秘密、あげるとキリがない。

エンジエルに比べると、私はあまりにも知らなさすぎる。

「私はもつとローゼンのこと知りたい」

誰に願つたわけでもないけれど、私はそう告げた。
取り敢えずは、そうね……。

「ねえ、あの日言つたこと……どういう意味？」

あの日の真意を知りたい。言葉に込められた意味を。

私が顔を向けるとローゼンはちらりとこちらを視線だけで確認する。それからゆっくりと首を動かして、正面から私を見た。伏し目がちなんて彼らしくもない。

「……一度しか言わないから、よく聞け」

「は、はい」

ただ目だけは真剣で私も尋常ならぬ雰囲気に姿勢を正してしまう。いつたい何を言われてしまうのかと身構えていると、彼はそつと私の耳元に口を寄せて、

「——愛してる」

と、愛を囁いた。

「ふえ……？」

「ここまで言われて言葉の意味がわからないはずがない。

私の心臓は狂ったように早鐘を打つて、全身が熱くなるのを感じていた。

すると間髪入れずに私の頬に手が添えられる。今もなお繋いでいる手とは反対の手で、気づけば私の唇に違和感。

息ができなくて、苦しくて、無限にも感じられる長い時間。

ローゼンの顔が至近距離にあると気付いて、私はそつと目を瞑つた。

甘く蕩けるような感覚に浸り、溺れていく。

「……慣れないことをするものではないな」

唇が離れて、ローゼンはそんなことを僅かに顔色を赤くしながら呟いた。

「さて、帰ろうか」

余韻に浸る間も無く、ローゼンは私の手を引いて。

そして私は、そんな彼に思いつ切り抱き着いた。

「おい」

「そういえばまだ話の途中なんだけど」

「？」

「どうしてローゼンは此処にいたの？」

もつと抱き着いていたくて会話を引き伸ばしてみる。

するとローゼンは、私の背中に腕を回す。

「ああ、出られなかつたんだ」

抱き締められる感覚に甘えていると、なんだか聞き逃してはいけないような単語が聞こえた気がする。

「出られなかつた……？」

「特に心配する必要はない」

不安に思つてゐると、頭を優しく撫でられる。

昔もこうしていてくれたような気がする。

いつだつたか忘れたけど、前にも何度か同じことがあつた。

「こゝから出る条件は『帰りたいと願う』こと。死者に囚われず、今生きようと思えば誰だつて出られる」

「それつてつまり、私と一緒にマグノリアに帰りたいってこと?」

「まあ、そうなるな」

素つ気ない返事をして、ローゼンは私の手を引く。

「帰るぞ、俺達の家に」

「……此処で私が帰らないつて言つたらどうする?」

「無理矢理にでも連れ帰る」

いつもは見せない強引な姿に、私はばつとドキドキして、そんな私の頬を撫でるように光が過ぎていく。

「ありがとう」

眩い光が私達を包み、魔法が解けていく。

私は明るい未来へ向けて、彼と共に歩き出した。

ストラウス

夜の帳が下りたマグノリアの街並みを懐かしそうに眺めながら、隣にいる少女は呟いた。

「懐かしいわね」

街の入り口から——否、旅の始まりからずっと。

手を握り、時には腕を組み、片時も離れず。

おはようからおやすみまで、お風呂もベッドも一緒で。

初めてのことに緊張しながらも、恋人としての生活を始めた。

そんなミラであるが、彼女はそれ以上に緊張したように魔導士ギルド『フェアリー・テイル』の前に立ち尽くしている。

繫いだ手からは、僅かな動搖が伝わる。

心配かけたとか、どんな顔して帰れば、なんて不安が思い浮かんでいるのであろう。

「大丈夫だ。俺が側にいる」

「クスッ。なんだか似合わないわね、ローゼンが言うと」

「……もう言わん」

「ああ、ごめんなさい。拗ねないでよ、ね？」

励ませば笑われ、俺は二度と言わないことを誓うと、慌てたようにミラが俺の腕をぎゅっと胸に焼き抱いた。

「もういい。ほら、いくぞ」

ミラの揶揄に嫌な気分になつたわけではない。

それで緊張が解れたならいいか、と帶同してギルドに入る。

夜でもなお賑わうギルド。ナツとグレイの喧嘩、樽で酒を飲む力ナ、もはや名物であるその一つや他の面々を眺めていたところ、目敏く姉の気配に気づいたエルフマンが此方を見た。

「姉ちゃん!？」

野太い叫び声に喧騒が止む。ギルド内の視線が一斉に俺とミラへ。ぽかーん、と呆けた顔の後、信じられないものを見たような顔に変わ

り、

「「「なんかローゼンが知らない女とイチャイチャしてるううううううう?!?!」「」」

——ギルドさえ破壊しかねない大声量が響き渡った。

「え、うそ、もうミラちゃんは諦めちゃったの!?!」

一番に詰め寄ってきたのはシャドウ・ギアというチームの紅一点、レビイという少女。誰よりも恋バナに興味があつたのか、そんな見当違いな発言をして、あわあわと慌てている。

「まるで俺がミラのことを忘れられずに追い駆けて行つた、みたいな言い方やめろ」

隣で本人が聞いているのだ。思わず否定したくなってしまうが、客観的にはレビイにはそう見えていたのかもしれない感じで、冷や汗を流した。

「諦めた、というよりもう捕まえたものね」

私も離さないと言わんばかりに胸を更に押し付けて、柔らかく微笑むミラに俺は視線を向けられなかつた。

そんなことをしている間にも、興味津々に聞き耳を立てる群衆を搔き分けてエルフマンが飛んでくる。レビイを押し退けて、姉を真つ直ぐに見ると泣きながら捲し立てた。

「姉ちゃん心配したんだぞー！急に霧の中に飲み込まれたと思つたら姿が消えて！そんで少ししたら兄ちゃんから先に帰つとけつて連絡が念話で飛んでくるし！」

その言葉にレビイは雷を撃たれたように固まり、そして再び俺の隣にいる美女を見つめた。上から下まで見定めるように見て、わなわなと震えて確信を口にする。

「うそつ、まさかミラちゃん！？」

「なにつ！？ミラだと！？」

「あれがっ！」

「嘘だろ別人じやねえーか！？」

その声に釣られて他の面子もミラと俺を取り囲む。「あ、本当だミラの匂いだ」とか言つた火蜥蜴男は誰にも悟られないようデコピン

で弾き飛ばし、昏倒させておく。

「もう、ローゼンつたらそんなに嫌なの？私の匂い他の人に嗅がれるの？」

「少し手が滑つただけだ」

見えていなくとも俺の仕業だと認識したのかミラにそう窘められて、俺は言葉を濁しながら目を逸らした。

「ただいまみんな。心配かけてごめんね？」

苦笑したままミラがそう告げると、口々に帰還の祝いの言葉が掛けられた。隣にいる俺とセットで取り囲み、マカオとワカバが余計な口まで挟みはじめる始末。

「まあ、一番心配してたのはローゼンだけどな」

「本当に。そんな心配するなら早く捕まえときやいいのによお」

「だよなあ。それもこんな美女になつて。もうローゼンなんて見向きされねえんじやねえのか？」

酔っ払いの口は留まるところを知らず、巨乳になつた、尻がエロいなどの猥談が繰り広げられる。

「ミラジエーン・ストラウス」

「あら、ロキ？」

そつちに気を取られている隙に、何処からか花束を持ってきたロキが床に跪く。花束を差し出し、彼は爽やかな笑みを浮かべて堂々とう宣つた。

「——僕と結婚してくれ！」

——突然の告白。

ミラはびっくりしたようだつたが、その首は縦に振られることはなかつた。

「ごめんなさい。私ね、もうストラウスじゃないの」

「ど、どういうことだよ姉ちゃん！」

『ストラウスじやない』と言わされて、エルフマンが動搖する。そんな弟の慌てつぶりにクスクスと小さく微笑みながら、本当に嬉しそうにミラは言つた。

「ミラジエーン・フラメル。それが今の私の名前。つまりね、エルフマン。
ン。私はもうローゼンと結婚したのよ」

仲の良さを主張するように、ミラが俺に抱きついた。

迷い子 前編

マグノリアへの帰還から約一ヶ月、新婚生活を楽しんだ。

大きく変化したところといえば、やつぱり寝室を一緒にしたところだろうか。朝起きると愛する人が隣にいて、おはようという何気ない朝のやり取りだけで、嬉しくて幸せな気持ちで一杯になつた。

それ以外は、特に変化はない。

多分、原因は一緒に住んでいたからだろう。半同棲していたようなものだし、付き合っていたようなものだから、お互いのことはある程度知っているし結婚に踏み出すのも早かつた。

周囲から見たら『もう結婚しちまえよ』と言われるほどの関係だつたわけで、文字通り過程をすっ飛ばして私達は夫婦になつたのだ。他にも違いがあるとすれば、ローゼンが私をちゃんと女性として扱ってくれることだろうか。以前はデートと言えば渋い顔をしていたのに、今は肯定してくれるのだから、それがほんのちよつぴり嬉しくて、甘えると甘やかしてくれるのだけども。それがいつもの比じやないくらいに甘くなつていて。

「ローゼン、はいあーん」

「……」

「どう、おいしい？」

「そうだな。昔より料理は上手くなつたか」

今日も今日とて新婚生活を満喫中。いつも通りテンションの低い彼に朝食の食べさせ合いっこをしていると、不意に玄関の扉が大きく開け放たれた。

「姉ちゃん！ 兄ちゃん！」

朝から突然訪ねてきた弟に、私は少し不機嫌になる。

今いいところだつたのに……。

「あら、エルフマンじゃない」

匙を置いて振り返ると、弟はすつゞい気まずそうな顔をしながら私

達を見ていた。

「この際だから言うぜ姉ちゃん。新婚だからそつとしておいてやれってマスターには言われてるけど、俺は言うぜ。兄ちゃんも姉ちゃんもイチャイチャしすぎだよ！」

「そう？まだ一ヶ月よ？」

「もう一ヶ月だよ！」

弟は何が不満なのか、私の指摘にそう返した。

「兄ちゃんも姉ちゃんもその間、一回もギルドに顔を出さねえじやねえか！」

どうやらエルフマンは寂しかつたらしくそんなことを言つてくる。「もう一ヶ月も経つていたのか？」

気づかなかつた、と言わんばかりのローゼンの反応にエルフマンが頑垂れた。

「兄ちゃん……」

多分、エルフマンが思つてゐる理由ではなく、ローゼンはただ時間を忘れていただけだ。きっと私といるのが楽しかつたからとか、そういつた意味ではないと思う。本を読んでたら一週間、ギルドに顔を出していなかつたとかよくあることだし。

「ごめんなさいねエルフマン。寂しかつたのよね？帰つてくる？」

「何が悲しくて二人の愛の巣に帰らなきや行けないんだよ……」

確かにエルフマンがいると私達がイチャイチャ出来なくなる。それは死活問題だ。

「それより兄ちゃん、仕事しなくて大丈夫か？結婚生活つて何かと必要なものがあるんじゃないのか？」

「特に問題はないな。一生遊んで暮らせんくらいの金はある」

だから、仕事もせずに私と四六時中一緒にいてくれるのだろう。お仕事に行く見送りを妻としてやりたいけど、それはそれで寂しいので現状維持だ。

「なんでもいいからギルドに顔出してくれよ。頼むから」

ついにエルフマンが本音を吐いて、机に突つ伏した。

その翌日、私とローゼンは一ヶ月ぶりにギルドへと足を運んだ。まではマスターへの挨拶に行こうかと思つて酒場の方に顔を出せば、いつも通りの席にマスターは座つていた。

「おはようござります。マスター」

「ん。来たか。ほほつ、並んでいるのを見るとやつぱり違和感があるのぉ」

そう言つてマスターはローゼンを揶揄う。「まさかお前さんが結婚するとは」と言わんばかりに、ニツと笑う。

「揶揄うために呼び出したのなら帰るぞ」

「そうじやないわい。実はお前さん宛に指名依頼が来ていての」

「断る」

「最後まで話を聞かんかい」

仕事を受ける気がないのか、ローゼンが拒否するとマスターは渋い顔をする。

「断れるわけがないじやろ。王族からの指名依頼じや」「ヒスイか……」

そういうえば前にも王族からの指名依頼が来ていたことがあつた。その時の依頼主もヒスイ姫だつた。

「ねえ、そういうえばローゼンつてヒスイ姫とどういう関係なの？」

「あれが子供の頃に会つて、懐かれただけだ」

既視感。私、同じ質問してゐる。

ローゼンの答えも一緒だ。

「それと呼び出した理由はもう一つある」

マスターが視線を隅の方へ移動させる。そこには見慣れない子供の姿がある。翡翠の瞳と、黄金のような瞳を持つ、五歳くらいの黒髪の少女がちよこんと座つていた。

「どうやらあの娘が父親を探しに来たらしくてのお」「このギルドにいるのか？」

「うむ。そうらしい」

ローゼンは少し考え込んだあと、カナを呼び出すと何やらぼそぼそ

と内緒話を始めた。何を言い合っているのかわからないけど、二人して納得して頷き合うと、黒髪の少女へ視線を向ける。

「おまえの妹じゃないか？」

「いやいや、知らない知らないあたし知らないよ！」

「異母兄弟……この場合は姉妹か？」

「うつ、ありえそう……」

そうして少女を見つめていると、少女がこちらをみた。そして、ぱあっと表情を輝かせると椅子から降りてとたとたと走ってきた。

「パパー！」

そう言つて飛びついた相手は、予想外の人。

「パ…パ…？」

私の愛する夫、ローゼンだ。

迷い子 後編

『パパ』と俺のことを呼んだ生命体が腹に突撃する。ボフツという音を響かせて頭から突っ込んだ少女は、そのまま額を擦り付けて甘えるような仕草を見せる。そうして一頃り甘えたあと、ふと視線を上げる。

「パパ？」

じーっと見つめてきた少女は、不安そうに首を傾げた。

思わず、「違う」という否定的言葉を呑み込む。

「ふむ。……どうしたものか」

結論から言えば、見覚えもなければ、身に覚えもない。娘がいた記憶もなければ、拾った記憶もない。

「パパ…パパ…パ…パ…パ…ツ」

隣では壊れたレコードのように「パ」を繰り返し、ミラが慌てふためく。どうしたものかと視線を向けると、目があつた瞬間に涙目になつてパニックになつた彼女は、

「うわーん！」

ギルドの出口へ一人駆け出してしまつた。

「うおつ、修羅場」

「ちょっとこれ頼む」

「追い駆けるの？」

「その必要はない」

少女をカナに預けていると、出口から真っ直ぐ出たはずのミラが駆け出した勢いのまま戻つてくる。そしてそのまま前も見ずに突っ込んできたところを抱き止める。

「あれ？ ギルドから出たのになんで!?」

「悪いな。追い駆けるのが面倒で魔法を使つて空間を歪ませた」

原理は単純、空間魔法でギルドから誰も出られないように固定しただけである。外からの侵入も、中からの脱出も、俺が魔法を解かない

限りできない。普段は使わない凄い魔術の無駄遣いと言われようが、使つてこそその魔法である。元々こんな使い方は想定していなかつたが。

「はい。おかげり」

「やあー、離して！」

「俺がそう簡単におまえを逃すと思うか？」

ぎゅっと抱き締めて、耳元に囁くと俺の胸元に顔を押し付けながら首を横に振る。

「……落ち着いたか？」

暫くの間そうして宥めた。

ミラは赤く目を泣き腫らしたまま、小さく頷く。

「それで……どういうことなの？」

この子は本当にローゼンの子なのか、と疑いをかけてくるミラにどう答えたものか悩む。違うと答えれば少女を傷つけることになるし、そうだと答えればミラを傷つける。八方塞がりだ。しかし、どちらかを傷つけるのなら、せめて真実だけを口にするべきだろう。俺も全く知らないのだから。

「俺も知らん。拾つた覚えもない」

拾つた、という状況はかなり珍しい状況かもしれないが、前例はある。

「ねえ、ローゼンって私達以外にも子供を拾つたことがあるの？」

ミラやエルフマン、そしてリサーナは俺が拾つてきた子供だ。エンジエルも拾つたと言えるし、他にも拾つた子供は沢山いる。自分で生活できるようになるまで面倒を見ていた。本来ならそこまでなのだが、例外としてミラ達だけはなんとなく手元に置いてしまつていた。その結果が嫁になるなど誰が想像しただろうか。

懐かしく過去に想いを馳せながら、ミラの質問に答える。

「ある。だが、これは本当に知らん」

完全に否定するとミラはホッとしたように一息。

ちゃんと信じたみたいで、安心した顔をする。

「そう。……でも、困ったわね」

疑惑は晴れたが問題は解決していない。ミラは自分の問題が解決すると今度は少女の心配をし始めた。帰る場所のない少女に思うと

「ねえ、ローゼン。この子の本当の両親が見つかるまで、私達の家で面倒を見ない？」

そして、そんなことを言い始めた。これにはカナもびつくりで口を挟まざにはいられない。

「ちよつ、ちよつとちよつと、いいの？あんたら新婚でしょ？」

哀想じやない」

「三歳がやう言ひのない異語はない
三歳きりの時間は減るぞ。いいのか？」

「うつ。……大丈夫だもん。そ、それに、子供できた時の予行練習にな

そんなことを言つて、さくうちこ顔を赤くして、ハミラ。

「まあ、一人きりの時間はいくらでも作れるしな」

いざとなれば時間操作系の魔法が使えるので、ミラが欲しい時に時間を作ればいい。そんな楽観的なことを考えて俺とミラは一先ず少女を預かることにした。

「それで名は？」

「……それがわからないみたいで」

首傾げる少女の代わりに
カナがそう答えた。

少女を預かることになれば色々と問題が出てくる。日用品や着替えなどを買い揃えなければならぬのだ。着替えはミラやリサーナの小さい時の物が残つてるのでそれを使えばいいが、消耗品はそうではない。必要なものを買い揃えるうちに日が暮れて、夕食や風呂を済ませると少女は眼たげに瞼を擦り始めた。

もう既に半分夢の世界へ意識が飛び立とうとしている少女の背中

を押して、ミラは少女を与えた寝室へと連れて行く。それから程なくしてミラは戻ってきた。

「もう寝たのか？」

「うん。だいぶ疲れていたみたい。それとも、お父さんに会えて安心しちやつたのかしら」

揶揄うミラに、俺はすぐさま仕返しをする。

「母親が優しくて美人だつたからかもな」

俺がパパと呼ばれているからか、ミラはなんとかママと呼ばせようとして奮闘していた姿を思い出し、苦笑するとミラが可愛らしく頬を赤くし膨らませる。

「あの子、私のことママつて呼ばないのよね。何故かしら？」

ちょっとだけ不満そうにそう言つて、俺が座るソファーアの隣へ腰を下ろす。腕に寄り掛かるとそのまま俺の腕を抱いて、頭を肩に乗せてきた。

「ねえ、ローゼン。ふたりつきりね」

抱いた腕を更に強く締め付けて、太腿の間に手が挟まる。右腕が彼女の感触に包まれて、妙に擦つたい。

「そうだな」

「……私達も寝室に戻りましょう」

ミラに促されるままにリビングを出て寝室へ向かう。その間ずつとミラはくつづいていた。寝室に入るとそのまま誘導するように俺の手を引いて、ベッドの前まで来ると俺の腕を巻き込んだままベッドの上に倒れた。

腕を引かれるままにミラに覆い被さつてしまつた俺は、そのまま彼女の頬に手を添えた。ついでに防音と侵入禁止の結界を張つておく。これで少女が起きて來ても大丈夫なはずだ。

「今日は随分と積極的だな」

「だつて今日一日、あの子のことばかり見てるんだもの」

どうやらそれが面白くないらしく、薄らと嫉妬しているらしい。手を伸ばし俺の首に腕を回すとそのまま何かを強請るように引き寄せようとする。

「ん」

目を閉じ、唇を突き出す。

誘われるままに、俺はそつと顔を近づけて――。

「……」

誰かの視線を感じて、唇が触れ合うまであと数センチというところで止まつた。

「……あ、続きをどうぞマスター。私のことはお気になさらず」

視線の発生源、寝室唯一の扉の前には、じーっと此方を見る少女の姿があつた。いつどこから入つたのか、しかしその雰囲気は昼までとは違い人形のように無表情。その顔でじつと観察される上、昼の様子とは全く違うからどうも異質に見えてしまう。

――だが、何故か警戒する気にならなかつた。少女から感じる魔力の波動が既視感のあるものであることが理由の一端か、俺はすぐにその正体を見破つた。

「……え？・え？」

ようやく侵入者に気付いたミラが、少女の方へ視線を向けた。そして、驚いた顔で固まるとすぐに状況を理解して顔を真っ赤にする。

「え、えっと、こ、これはね。違うの！」

まるで浮氣の言い訳を並べ立てているような台詞だが、実際は子供に子供を作る行程を見られた親の反応である。普通はこのように動搖するものなのか、と客観的に事態を理解した俺は、取り敢えず落ち着くように彼女をそのまま抱き上げて胸の中に顔を埋めさせたまま、ベッドに座つて彼女を宥め始めた。

「キス、接吻、ちゅー、と呼ぶものなのは理解しています。それが始まりに過ぎないことも」

「は、は、始まりとかそういうんじゃないくて！」

パニック状態でミラは言い訳を口にする。完全に少女の掌の上だ。

「落ち着け。ミラ」

「だ、だつて、あの子に見られたのよ!」

その少女を見て、次第にミラが冷静さを取り戻して行く。少女の様子が昼間と違うことに気づいたのだろう。少女を見て目を白黒とさ

せる。

「あれ？あれって……あの子、よね？」

無表情で此方を見る少女に、ミラが不安そうに漏らす。

俺は安心させるように頭を撫でる。

「間違いない。……が、俺にも理解できない。結界魔法であり、何処にでもあつて何処にも存在しないはずのおまえが人型になつて外を出歩いているとは何の冗談だ？」

「そのお話はマスター達が事を終えるまで待つてもよろしいんですけど」

「「よくない」」

「それは残念です。人の営みには興味があつたのですけど

変わらぬ無表情と、抑揚のない声で少女が言う。

そして、瞑目して何かを思い出すように視線を彷徨わせた。

「取り敢えず、この身体の話ですね。と言つても語れることなど多くはありませんが」

そう前置きして、少女は結論から言つた。

「造つちやいました」

「……造つた？おまえにそんな機能をつけた覚えはないが」

「簡単ですよマスター。人間の情報の根幹たる遺伝子情報を雄と雌の番となるよう用意して、マスターの植物魔法を応用した特殊な薔の中で合成、そして完成した器に“私”をインストールしました。ただそのままでは器が耐え切れなかつたので、魔導書に結界魔法である私と造つた器を繋ぎ固定化して誕生したのが、私です」

「つまり、魔導書でありながら、半分人間、半分魔法。半魔法生命体と言つたところか」

「ただ問題がありまして。造つた器に自我が芽生え、魂が宿つてしまつていました」

それが昼間の少女の姿なのだろう。無邪気で、あどけない、子供らしい姿を持つあれこそが、本来根付く筈だつた魂だ。

「もう一人の私は“私”がいることを理解していますが、あまりよくわかっていないようです。また私も彼女が眠つてゐる間しか表に出

ることが出来ません」

少し残念そうに語るが、顔は無表情のままだ。

「そういうわけでマスター。私に名前をつけてください」

「確かに名前がないと不便だな」

「それに魔法名と個体名を貰えないと、存在が不安定なままですから」
名をつける理由をそう主張されれば考えるしかない。だが、悩む。
思考の海に意識を落としていると腕の中から声が上がった。
「なら、アルマリアなんてどう?」

「どういう意味なんだ?」

「あの絵本の少女の名前なんだけど……」

「なるほど。それならいいかもしませんね、マスター」

ミラが提案した名前を気に入つたようである。

あとは、魔法名だが……。

「魔導書か……」

「私としては、マスターの名の一部を頂きたいと存じます。本の中身
はほぼマスターの蒐集した魔法なので」

「ならば、ロゼ・フラメールの写本でどうだ?」

「いいですね。それがいいですマスター」

少女——アルマリア——は本当に嬉しそうに微笑んだ。